



TITLE:

寶山靈泉寺石窟塔銘の研究 - 隋唐時代の寶山靈泉寺

AUTHOR(S):

大内, 文雄

CITATION:

大内, 文雄. 寶山靈泉寺石窟塔銘の研究 - 隋唐時代の寶山靈泉寺. 東方學報 1997, 69: 287-355

ISSUE DATE:

1997-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66782>

RIGHT:

寶山靈泉寺石窟塔銘の研究

—隋唐時代の寶山靈泉寺—

大 内 文 雄

はじめに	二六	三 光天寺故大比丘尼普相法師灰身塔 題記・塔銘	三三
一 寶山石窟の地理的概況	二九	四 報應寺故大海雲法師灰身塔 題記・塔銘	三四
二 東魏北齊・隋・唐時代の相州と靈泉寺—歴史地理的概況	三〇	五 聖道寺故大比丘尼靜感禪師灰身塔 題記・塔銘	三四
三 寶山塔銘に見られる唐代相州の寺院—靈泉寺及び大慈寺、慈潤寺、雲門寺	三二	六 故大優婆塞晉州洪洞縣令孫伯悅灰身塔銘	三五
（一）寶山塔銘の概況	三三	七 慈潤寺故大慧休法師灰身塔 題記・塔頌・刻石記 徳文	三六
（二）靈泉寺	三六	八 大唐願力寺故瞻法師影塔之銘并序	三九
（三）大慈寺	三七	九 大周相州安陽靈泉寺故寺主大德智法師像塔之銘并序	三三
（四）慈潤寺	三九	十 大唐相州安陽縣大雲寺故大德靈慧法師影塔之銘并序	三五
（五）雲門寺—光嚴寺	四〇	十一 唐故方律師像塔之銘	三五
四 寶山靈泉寺と林慮山峽谷寺、及び翻經事業	四〇	十二 唐故靈泉寺玄林禪師神道碑并序	三五
五 寶山塔銘における尼寺、尼僧、優婆夷	四三	十三 靈裕法師灰身塔大法師行記	三九
寶山靈泉寺石窟塔銘釋文		十四 方法師鑲石班經記	三三
一 光天寺故大比丘尼僧順禪師散身塔 題記・塔銘	三二	十五 慈潤寺故大靈琛禪師灰身塔銘文	三三
二 唐故慧靜法師靈塔 題記・塔銘	三二	寶山靈泉寺石窟石刻目錄	三五

はじめに

河南省の寶山靈泉寺石窟については、常盤大定によって一九二二年（大正一〇）に行われた調査・研究を嚆矢として、以後、隋・靈裕の遺跡或いは三階教のそれとして注目されて來た。^①しかし牧田諦亮「寶山寺靈裕傳」^②を最後として寶山靈泉寺石窟塔銘（以下、寶山塔銘と略）を用いた專論は見られない。またこの論文には「河南寶山石刻目錄」が附録として載せられている。一方、中國では一九八〇年代になって『文物』誌上等に數次にわたり報告と研究が發表されたが、一九九一年に河南省古代建築保護研究所より『寶山靈泉寺』が刊行された。これは一九八三年以來の調査研究の集大成とも呼べる巨冊である。これによって常盤大定以後初めて學術的調査に基づく報告が我々に提供されることとなった。

ところで河南省古代建築保護研究所の『寶山靈泉寺』にはすべての塔銘が翻刻され收載されている。それらを、描き起こされた灰身塔圖や寫眞と對應させることによって有益な情報を得ることが出来る。しかし残念なことにその翻刻には誤讀が目立つ。また當人文科學研究所には寶山靈泉寺石窟の石刻拓本が重複して所藏されている（石刻第九輯六一函、中國金石拓本第四三・四四函）。牧田論文附録の「河南寶山石刻目錄」はその内の石刻第九輯六一函についてのものであり、その順序は研究所登録番號によっているが、そこに見られる石刻拓本の分類にもいくつか修正すべき點がある。

寶山塔銘には、既に牧田論文に指摘があるように、唐代の度僧制、とくに恩度に關する資料を含むが、それと共に唐代僧尼の寺院所屬の問題について、相州という一地域に限定された好個の資料を提供してくれる。これまで寶山塔銘を利用した研究が少なかった理由として、一つにはその現状の全體像が不明確であったことと、石刻資料の紹介が斷片的であったこと等が挙げられる。現状については常盤大定以來七〇年にして次第に明らかになりつつある。今回の小論では、以上のような状況を踏まえ、「六朝美術の研究」班の席上において討議に附された唐代の比較的長文の銘文を持つものの釋文、

及び當研究所所藏拓本を基とした「寶山靈泉寺石窟 石刻目錄」との紹介を主眼とし、併せて寶山靈泉寺とそれをめぐる相州の寺院について若干の注目し得る事柄につき、寶山塔銘を用いて説明しておきたい。

一 寶山靈泉寺石窟の地理的概況

主に河南省古代建築保護研究所の『寶山靈泉寺』によって寶山石窟の地理的概況を述べてみる。靈泉寺は河南省安陽市西南三〇^{キロメ}、太行山脈の支脈に連なる西方は寶山・懸壁山、北方は馬鞍山・礦窟山、東方は嵐峰山・鷄冠山、南方は虎頭山・覆釜山の八山に圍まれた峽谷盆地に位置しており、これらの中の懸壁山については、今回釋文を附した長安三年（七〇三）の「大周相州安陽靈泉寺故寺主大德智法師像塔之銘釋并序」（釋文九）に「本寺□懸壁山の陽に起塔供養す」と言い、また開元五年（七二七）の「大唐相州安陽縣大雲寺故大德靈慧法師影塔之銘」（釋文十）にも「靈泉寺西南の懸壁山に歸葬す」と出ている。この靈泉寺を基點にして、西側の寶山（圖1）、東側の嵐峰山（圖2）、東北側の馬鞍山に、現在、編號が附された大小二〇九の石窟・佛龕・塔龕が存し、この中、石窟としては大住聖窟・大留聖窟二つがある。

大住聖窟は靈泉寺西方五〇〇^メの寶山南麓の斷崖に存し、隋の開皇九年（五八九）、靈裕によって開鑿された。塔龕群はその西方また五〇〇^メの寶山東南麓の東から西にかけ、上中下三層に排列されて、隋・唐・北宋時代にわたる各種石窟二〇が存在する。

大留聖窟は靈泉寺の東方五〇〇^メの嵐峰山東側に存し、東魏の武定四年（五四六）、道憑によって開鑿された。塔龕群はその東方更に五〇〇^メの嵐峰山西麓に上中下三層に排列され、東魏の大留聖窟を除く外は、皆唐代のもの八八が存在する（但し、靈泉寺東北方の馬鞍山南麓の塔龕四を含む）。ここには北宋紹聖元年（二〇九四）の徳殊の敍並びに題額、師慶の書によ

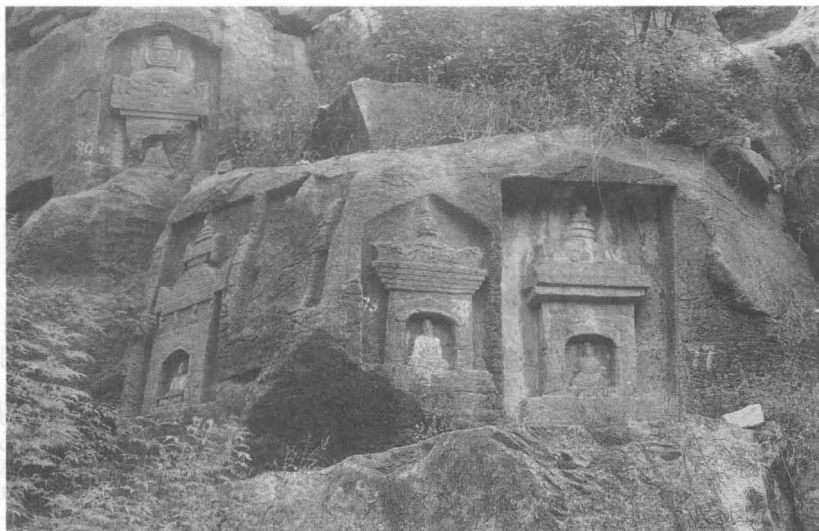


圖1 寶山塔林

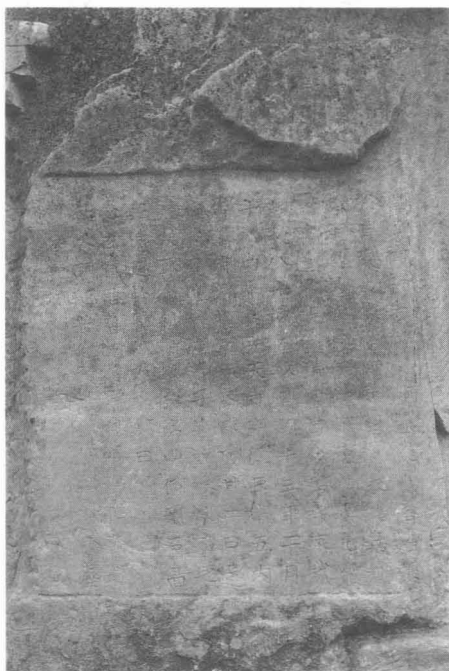


圖3 僧順散身塔銘 嵐峰山塔林



圖2 嵐峰山塔林

る「有隋相州天喜鎮寶山靈泉寺傳法高僧靈裕法師傳釋并序」がある（今回未收）。

なお、『寶山靈泉寺』では、靈泉寺東南方五キロメの善應村龜蓋山（古くは善應山）南麓に存する小南海石窟（善應石窟）も併せて紹介している。これは北齊の天保年間（五五〇～五五九）に方法師と僧稠によって開鑿されたもので、西窟・中窟・東窟の三窟に分かれ、中窟に乾明元年（五六〇）の「方法師鑿石班經記」（釋文十四）や僧稠の題記（「比丘僧稠供養」）がある。しかし、ここは靈泉寺とは離れた獨立の石窟と考えられ、事實、顧燮光の『河朔訪古新錄』（卷二）では、「慈潤寺故大靈琛禪師灰身塔銘文」（釋文十五）について『安陽縣金石錄』が寶山に列入しているのは誤っているとして、この銘文がある善應山と寶山とを區別している。この兩石窟の關係は、造營の時期、或いはそれらの位置が他の周緣石窟と比べてとくに近接していることから極めて密接なものがあると考えられるが、この小論では靈泉寺石窟とは區別して考えておきたい。

二 東魏北齊・隋・唐時代の相州と靈泉寺——歴史地理的概況

寶山石窟の中、大留聖窟が東魏、善應石窟が北齊の、そして大住聖窟が隋の開窟であることは前述したが、前二者と後者との間において、行政史上、相州一帯には非常に大きな變動が現れている。

東魏の初め、都が洛陽から鄴（河北・臨漳縣西）に遷され、以來、この一帯は東魏北齊の中心地域として西北方のもう一つの都晉陽（太原）と並んで發展を遂げ、また首都機能の移轉と共に洛陽から鄴へは大量の佛教に關わる人員資材も移された。⁽¹⁾ 佛教都市鄴の出現である。北齊時代になると、官寺と呼ばれる大莊嚴寺（文宣帝時代）、大總持寺（武成帝時代）、大興聖寺（同上）等が建立され、また東魏に建てられた定國寺も官寺と稱されていた。中でも大興聖寺は、曹魏以來の鄴城の象徴とも言うべき三臺宮全てが寺とされた（武成帝河清二年—五六三）もので、鄴城西北隅に聳えたつていたのである。⁽²⁾ この

ような鄴城内における佛寺建立の盛行と相俟って、その周辺には今に残る鼓山（滏山）の南北響堂山石窟、水浴寺石窟、或いは林縣峡谷千佛洞等の石窟寺院が次々に造營されて行き、寶山石窟もそれらと時代を同じくして開鑿された。これらの石窟に共通するものとして、摩崖石經の存在が挙げられるが、その一類のものとして、近年涉縣中皇山の摩崖石經が報告されている。⁽⁷⁾そしてこれらの石窟には歴史地理的位置に關して共通する點がある。それはいずれも當時の政治的機能のもう一つの中心であった太原との交通線上にあることである。⁽⁸⁾上記の鼓山（滏山）の石窟は、太行八陁と呼ばれる太行山脈を東西に横切る交通路の内、東魏北齊時代にとりわけ重要度が高かつた滏口陁の入り口に當たり、鄴城西北の滏口（河北・邯鄲市西南、磁縣西北）から西へ涉縣（河北・涉縣）、壺關を経て太行山脈を越え西北行して襄垣（山西・襄垣縣）へ、或いは西南行して上黨（山西・長治市）へ出て、太原に通ずる。また寶山靈泉寺石窟、峡谷寺石窟は、鄴城南方の司州（相州、河南・安陽）から林縣（河南）、壺關縣（山西・壺關縣）を経て上黨に至る所謂穴陁道の路線上に位置しており、この上黨にも北魏の清化寺石窟、唐の寶應寺石窟、千佛溝石窟等が現存している。⁽⁹⁾

北魏末六鎮の亂以降の政局の立役者である爾朱榮、高歡は本據地晉陽から太行山脈以東に派兵する時、しばしば滏口壺關道やその北方の壽陽（山西・壽陽縣）から井陘關を経て井陘（河北・井陘縣）に至る所謂井陘道を利用し、高歡の政權樹立後は東魏北齊代を通じて、高歡や北齊の皇帝達によって晉陽—鄴間の往來が頻繁に行われ、⁽¹⁰⁾勢い佛教僧の活動も太行山脈を挾んで盛んになって行ったのである。その活動は、北周武帝による晉陽攻略に續く鄴の陷落（建德六年—五七七—正月）後間もなく三臺の大興聖寺が廢毀されたことに象徴されるように、舊北齊領全域に施行された廢佛令によって停滯を餘儀なくされ、また政治機能の中心も間もなく洛陽に移された。楊堅による周隋革命の際、復佛が行われ、隋建國後、佛教の大々的な復興が圖られたことは周知のところであるが、その前夜、鄴城は北周靜帝の大象二年（五八〇）の相州總管尉遲迴の亂を契機に焚燒され、以後、南方の安陽に相州の治所が移されて、鄴城は相州の一縣に過ぎなくなつて行く。尉遲迴

の亂は六月に起こり同年一〇月には韋孝寬によって平定されたが、この反亂は翌七月の鄖州（湖北・安陸）總管司馬消難の舉兵を惹起して楊堅の父楊忠以來縁故の深い地域を危険な状態に陥らせ、また八月には益州總管王謙の舉兵を生む等、反楊堅派による廣範圍な反亂に發展したもので、楊堅にとって周隋革命を遂行する上で最も容易ならぬ事件であつた。⁽¹⁾ 東魏北齊以來の繁華を誇つた鄴が焚毀されたのには、將來の楊氏政權にとっての禍根を絶つ意味があつたものと考えられる。『舊唐書』卷三九地理志二によれば、煬帝の初め、鄴の故城にあつた大慈寺を鄴縣の政廳とし、漸く唐の貞觀八年になつて治所として小城を築いたとあり、鄴城焚毀の徹底振りが窺われる。このように北周末以來、相州の行政の中心は鄴から安陽に移つたものの、佛教僧の活動は、東魏北齊以來の『地論』、『攝論』に代表される教學の傳統や、後述するように律學、禪定を重んずる風土の中で、例えば末法思想と連動しつつ次代の佛教を擔う人々をも輩出して行つた。隋唐代の新佛教たる信行の三階教はこの相州の地において、曇鸞以來の淨土教は太行山脈を西に越えた汾水の流域において育まれて行つたのである。寶山靈泉寺の擴充と發展が隋の靈裕による大住聖窟の造營と文帝の靈泉寺題額の下賜と經營の援助にあつたこと、及び今日見ることの出来る多數の灰身塔群の背景に靈裕の活動があつたこと等は前記諸論文に指摘されている。

三 寶山塔銘に見られる唐代相州の寺院——靈泉寺及び大慈寺、慈潤寺、雲門寺

(一) 寶山塔銘の概況

寶山に残されている摩崖に彫られた多數の塔群には、灰身塔の他、枝（支）提塔、散身塔、碎身塔、靈塔、影塔、像塔等の名稱がある。これら多數の灰身塔には比較的長文の銘文をもつものもある（その大部分については釋文を参照されたい）が、殆どは沒年と起塔の年次を記すのみか、或いはそれすらないものも多い。これらの灰身塔がこのように多數現存するにつ

いては、既に常盤大定が「寶山は、附近諸寺の共同墓地たりしが如き觀」があり、「是の如き灰身塔が、獨り寶山にのみ見られるのは、恐らくは、靈裕の創意に出で、他は悉く其の轍を襲へるものであらう」と言い、『寶山靈泉寺』では「寶山塔林」とも呼びうることを言っている。⁽¹²⁾ 塔龕題記に見られる寺名(造立者所屬の寺名を含む)は多い順に記せば、聖道寺(三〇例)、慈潤寺(二二例)、光天寺(八例)、靈泉寺(四例)、報應寺(二例)、大雲寺(二例)、光嚴寺、大慈寺、願力寺、清行寺(以上各一例)、この内、聖道寺、光天寺、清行寺は常盤大定が指摘するように尼寺である。寶山塔銘に特徴的なものに尼僧數の多さがあるが、これについては後述する。なお付載した「石刻目錄」を一覽すると明らかなように、起塔の月日に四月八日、或いは二月八日と記すものが多い。釋迦佛誕生の日に合わせて起塔供養した様子が窺える資料である。但し死亡から起塔までの期間は一定しておらず、最長で六年半、最短のものは九カ月、一年から一年半までのものが比較的多い。この點についての検討はまだなされていない。

寶山石窟に見られる紀年銘を持つ灰身塔群には、隋の開皇・仁壽のもの六例、唐の貞觀二四例、永徽一五例、顯慶一一例、龍朔一長安一六例、開元・天寶七例、大曆一例、咸通四例がある。即ち貞觀から顯慶まで、六二七年から六六〇年までの凡そ三〇年間に頂點を形成し、次の龍朔から長安まで、六六一年から七〇四年までの凡そ四〇年間にわたる低山を示し、以降は急激に減少していることがわかる。それは今回釋文を附した僧尼についても同様である。次に貞觀時代以降に没した靈琛以下の生没年と示寂の寺名とを没年順に記してみる。

僧名	生 年	没 年	西 曆	年 齡	卒 所
靈琛	北齊天保 五年	貞觀 二年	五五四	六二八	七五 慈潤寺
僧順	北齊天保 六年	貞觀一三年	五五五	六三九	八五 光天寺
慧靜	北齊武平 四年	貞觀一五年	五七三	六四一	六九 「寺所」

普相	北齊天統二年	貞觀一七年	五六六	六四三	七八	光天寺
海運	北齊天統元年?	貞觀一九年	五六五?	六四五	八一?	報應寺
靜感	北齊太寧元年	貞觀二〇年	五六一	六四六	八六	聖道寺
孫伯悅	?	貞觀二〇年	?	六四六	?	
慧休	東魏武定六年	貞觀二〇年	五四八	六四六	九九	慈潤寺?
神瞻	唐貞觀一八年	垂拱二年	六四四	六八六	四三	願力寺
智法師	唐貞觀九年	長安二年	六三五	七〇二	六八	靈泉寺
靈慧	唐總章元年	開元四年	六六八	七一六	四九	福聚寺
玄方	唐垂拱二年	開元一〇年	六八六	七二二	三七	大慈寺?
玄林	唐顯慶元年?	天寶五年	六五六?	七四六	九一?	主德里

この最末端に位置する玄林の神道碑（「故靈泉寺玄林禪師神道碑并序」——釋文十二）を見ると、玄林の功績を言う中において「今、山上、十を數うるの處に窰塔波有」と記されている。これなど、既にこの頃に靈場としての寶山の姿が確立されていたことを物語っているものであろう。

右の中、『續高僧傳』に傳がある者は慧休（卷一五）のみで、神瞻以下も『宋高僧傳』には著録されていない。ところでこれらには鄴や安陽を初めとして相州に地縁を持つ者が非常に多い。普相（尼）、靜感（尼）は父祖遠祖の代より相州の人、玄林や在家信者の孫伯悅は相州堯城（安陽東方）の人、智法師、靈慧、玄方は鄴の人として生まれ、神瞻は安陽の人である。この他僧順（尼）は韓州涉縣（河北涉縣）、慧休は河北平舒（河北大城）とある等、これらも地縁性を指摘してよいであろう。また慧靜は河東聞喜（山西聞喜）の裴氏、且つ三階教を通して相州に関わる可能性のある者として既に塚本論文に

述べられている。⁽¹⁴⁾

(二) 靈泉寺

靈泉寺名が灰身塔に明記されているのは長安二年の「大周相州安陽靈泉寺故寺主大德智法師像塔之銘」(釋文九)の外は、貞觀二十一年七月八日の紀年を持つ「靈泉寺故大修禪師灰身塔」と天寶六載の「靈泉寺元藏灰身塔」及び天寶八載の「故靈泉寺玄林禪師神道碑并序」(釋文十二)の四例のみであつて、寶山石窟の灰身塔群の中では少ない方に屬する。それにも拘わらず靈泉寺の寺域が付近諸寺の僧尼の墓塔の所であつたという性格を持っていた理由として、東魏北齊の道憑・僧稠・方法師、隋の靈裕以來の傳統を受け繼いだ寺としての名聲があつたことが考えられているが、⁽¹⁵⁾それには、殊に靈裕の弟子であり、且つ北周の廢佛以來荒廢していた寺域を師と共に修復した慧休(『續高僧傳』卷二五)や貞觀六年に「靈裕法師灰身塔大法師行記」(釋文十三)を撰文した海運、或いは六〇年にわたり靈泉寺の維持に盡くした玄林等のとりわけ長命を保つた僧の果たした役割が大きかつたであらう。

次に右に記した僧尼の塔銘の中から、長安三年(七〇三)建立の智法師塔銘について見てみる。この塔銘は壁面が摩滅して判讀し難い部分が多いが、それでも以下のことが判明する。彼は七歳で大慈寺の寺主超法師のもとに童行となり、貞觀二〇年(六四六)一二歳の時、恩度により剃髮して沙彌となり本寺(靈泉寺)の曇源律師に律藏を學んで、恐らくここで受具し大僧となつた。また慈潤寺の寺主智神論師に三經二論を學び、一方、易や老莊・素問等にも通じたという。靈泉寺主として長安二年に没し、その後、起塔供養した門弟に大雲寺玄果、靈泉寺の玄暉等いずれも玄を頭にいただく四名がいる。

以上は一例に過ぎないが、靈泉寺名を刻む塔銘が少ないとは言うものの、例えば玄林の神道碑に「東は雲門に帶なり、

西は硤谷に連なる」と言っているように、安陽の寺々や雲門寺、或いは峽谷寺と靈泉寺との複雑な関わりをこれらの塔銘の中から窺うことが出来る。次にこれら塔銘に現れる注目すべき寺院について、以下簡単に紹介してみる。

(三) 大慈寺

智法師塔銘に言う大慈寺は、東晉以来の太子思惟像を安置していた鄴縣の大慈寺であろう。その太子思惟像はもと徐州にあり、後に北魏孝文帝によって都の平城へ齎され、北齊後主の時に鄴に迎えられ、唐代には鄴縣の大慈寺にあったと伝えられている⁽¹⁶⁾。寶山塔銘の中では「石刻目錄 無紀年銘」のNo. 8の一例だけであるが、先述したように貞觀九年に鄴縣の小城が築かれるまではその廳舎として利用されており、開元一五年建立の「唐故方律師像塔之銘」(釋文十二)によると鄴縣の人である玄方は、この大慈寺において二三歳で出家し、中宗の神龍元年(七〇五)二〇歳の時に、恩度により剃髪して龍興寺に配せられ受具しており、その後、開元一〇年に三七歳で没するまでの一〇餘年間を律師として僧衆を統理している。大慈寺は鄴縣城内でも代表的な寺院であったと思われる。

(四) 慈潤寺

次に慈潤寺は、寶山石窟の塔銘中、僧寺として最も遺存例が多いものの、『續高僧傳』では僅かに先に述べた靈裕の直弟子である慧休の傳のみに見えるだけである。そこで開元五年の「大唐相州安陽縣大雲寺故大德靈慧法師影塔之銘」(釋文十)によって今少し詳しく見ておきたい。

靈慧塔銘によると、彼は一〇歳で慈潤寺の方禪師のもとに童行となり、弘道元年(六八三)一六歳の時、智法師に同じく恩度によって剃髪し沙彌となり、安陽縣の大通寺に配せられた後、洛陽佛授記寺の翻經大德感法師の下に行き、また敕

によって同寺に留まり感法師の侍者に充てられた。その後、本州（相州）安陽縣大雲寺の律師教授に充てる旨の牒を受けて故郷に歸り、睿宗の景雲年間に再び懲召されて都（長安？）に行き、大徳として六年間滞在した。後、許されて大雲寺に戻る途次であろう、汾州平遙縣（山西・平遙）の福聚寺に没した。靈慧の一族である慈潤寺僧玄晞が平遙に赴き茶毘收骨して歸郷、同じく一族の慈潤寺僧玄□・圓滿等が靈泉寺西南の懸壁山の陽において、今も現存する影塔を造ったのである。

このように靈慧は慈潤寺において出家し、先述の智法師も一二歳（貞觀二〇年—六四六）の時、その寺主智神論師のもとで佛教の經・論ばかりでなく老莊や醫書をも學んでいる。また「大唐願力寺故瞻法師影塔之銘」（釋文八）即ち神瞻塔銘によると、彼もまた二二歳（麟徳元年—六六四）の頃、寺主であり昆曇（論）師であつた智神に學んでいる。智神は智法師に教授した時、既に寺主として記されているから、慧休没（貞觀二〇年）後、直ちに慈潤寺主を繼いだ者であろう。ところで智法師塔銘について見てみれば、彼は慈潤寺に行く前に靈泉寺において律を學んでいた。慈潤寺は教學の道場として、また靈泉寺はとりわけ律學のそれとしての重要施設であつたのではなからうか。他方、唐代玄宗朝までの師弟關係の上で考えれば、これらの寺はいずれも靈裕を起點とし、且つ律に關わりある寺院として把えてよいと思われる。

『續高僧傳』の著者道宣は、貞觀九年に沁州綿上縣（山西・沁源縣北方）を出發して鄴縣西南にある僧稠（『續高僧傳』卷一六）ゆかりの雲門寺址や鄴縣西南の鼓山石窟、また鄴縣日光寺に住む律學の碩學法礪（同卷二二）を訪ねる旅に出ており、更にその往復いずれかの途次、太行山脈を挟んで西の潞州（山西・長治市）法住寺に住む靈裕の弟子曇榮（同卷二〇）や律僧道瓚（同卷二二・慧進傳附）に會い、或いは林慮山洪谷寺に行き四分律の先達である僧達（同卷一六）の遺址に禮謁している。¹¹道宣が相州一帯への旅を行ったについては、「相州律師」と呼び「一方の名器にして……山東に獨歩す」（『量處輕重儀』後批及び序¹²）と稱えた法礪を尋ね、積年の疑問を質すことに重要な理由の一つがあつた。法礪も靈裕の弟子である。その傳には、彼が貞觀九年一〇月、六七歳をもって鄴縣の日光寺で卒したことを記す直前に、法礪の四分律研究に關連させて慧

休の律學における功績を述べており、慧休の本傳にも法礪の講律の席上での兩人の問答を挿入してその清慎の姿勢を伝え、また、明律篇論（卷二二）にも慧休論士としてその名をとどめている。しかし慧休に對する高い評價がなされているのは『攝大乘論』を初めとする義學の面においてであつて、『續高僧傳』の道傑傳（卷一三）にはそのことが記され、また義解篇論（卷一五）の最後には靈裕の學統を繼承した者として慧休の名が擧げられている。そもそも慧休の本傳そのものが、没年の直前の貞觀一九年を現在として書かれた長文のもので、注（13）にも述べたように美辭麗句を連ねた塔銘とは違ひ具體性に富んでゐる。傳の末尾に「餘、以て親しく微音を展べ、茲の景行を奉ず」としながら、そのおおよそを表すのみであることを恨みと云つてゐるのは、彼の眞情であらう。興味深いのは、續いて慧休の弟子曇元を行乞高潔の僧として紹介するところに「今、林慮・寶山に託靜す」（同上）と云つてゐることである。道宣が慈潤寺に行つたという明文はないが、潞州から林慮山を経て鄴縣や相州安陽に至る往還の途次に、慧休が長年止住した維持經營に努めた慈潤寺や靈泉寺を訪ねて行つた可能性は高いと思われる。また慈潤寺は、信行の弟子である靈琛が貞觀二年に没するまで止住してゐたように、三階教に関わりある所でもあつた。⁽²¹⁾

（五）雲門寺—光嚴寺

前述のように道宣は僧稠の遺址である雲門寺を訪ねてゐたが、ここは貞觀の頃、光嚴寺と呼ばれてゐた。そのことは僧稠傳の他、隋代に靈裕に隨つて入關した智首の傳（卷二二）にも言われている。⁽²²⁾僧稠傳によれば雲門寺は北齊の天保三年（五五二）、鄴城西南の龍山の陽に造立され、「方法師鏤石班經記」（釋文十四）に雲門帝寺とあるように文宣帝敕建の大事であつたが、周武廢佛の時に臣下に下賜され、僧稠傳に「隋初興復し、奄ち初構に同し」とは言うものの、煬帝の頃には「凋喪」の状態であつたらしい。しかも隋末唐初の竇建德或いはそれに續く劉黑闥の亂によつて一部の房宇を残し、他は皆焼

け落ちてしまったのである。⁽²³⁾ 寶山の塔銘中では、僅かに「石刻目錄 有紀年銘」のNo.46「光嚴寺故大上坐慧登法師灰身塔記」の一例のみであり、また慈潤寺、靈泉寺のように他の銘文中に度々現れるものもないことから、雲門寺の跡に立つ一寺院にすぎなくなっていたものであろうか。しかし一方、「玄林禪師神道碑」(釋文十二)の末尾に「連岡萬古にして、雲門・靈泉、飛塔巋然たり」とあるように、開元天寶の頃までの相州一圓において象徴的位置を占めていたのである。⁽²⁴⁾

四 寶山靈泉寺と林慮山峽谷寺、及び翻經事業

ここに例として用いる塔銘は先述した神瞻塔銘と靈慧塔銘である。鄴縣に生まれた神瞻が慈潤寺主智神のもとに出家して『中論』や小乗を學んだのは二一歳の時であったが、それまでの間は、『老子』はもとより經史、諸子、陰陽圖(緯)の學業に打ち込んでいたために出家が遅れた人物である。慈潤寺の項で述べたように同門の先輩に靈泉寺の智法師がいた。智法師はそのまま慈潤寺に留まって勉學を續けたらしく、後に靈泉寺の寺主となったが、神瞻は乾封元年(六六六)二三歳で得度の後は、峽谷寺の操禪師のもとに行き、四分律を初めとして大小乗の三藏に通じた學僧となった。佛圖澄の碑文等を作ってもおり、文筆の才に恵まれていたらしいが、垂拱二年(六八六)四三歳で早世し、その五年後の天授二年、寶山の別谷において遺骨を茶毘に附し起塔供養されている。その塔銘に記す願力寺については寶山石刻中にこの一例を見るのみで、銘文にも何等述べるところがない。

この神瞻とほぼ同時期の林慮山峽谷寺の學問僧を伝える記録に『林縣志』卷一四・金石上に收載する「述二大德道行記」がある。開元一九年(七三二)、弟子蔡景の撰である。⁽²⁵⁾ 二大德とは鄴城出身の義紉とその同郡の乾壽を言う。二人共に生没年不詳であるが、いずれも武周朝に剃髪している。

義紬は睿宗の文明初歳（六八四）、落髪して^{（26）}峽谷寺に入り内典外典を學んだ後、悉曇に通じていたところから、長安洛陽の義淨の譯場に「詮辭詮義、筆授綴文」の役割を擔って參加している。次いで長安の大薦福寺や慈悲寺に入り、内道場において轉經行道を行い、また年次は明らかでないが前後四年をかけて乾陀羅國に至り鄔帝弟婆（烏帝提婆）三藏を伴い眞容の畫像や舍利、梵本を齎している。烏帝提婆は『開元釋教錄』卷九によれば、睿宗の景雲二年（七一）、大薦福寺翻經院における義淨の譯經に關わって「讀梵文」者として名を留めている（大正五五・五六九a）が、義紬の名は經典目錄類にはない。こうして一三年にわたる在京の後、歸郷を奏請して峽谷寺主となっている。

乾壽は二〇歳の時に出家して『法華』・『唯識』・『俱舍』・因明等の經論を學んだ後、則天武后の證聖の歲（六九五）に剃落して^{（27）}峽谷寺に屬した。次いで「道行記」に「別敕を奉じて、當寺の教授法師に補充せらる」とあり、「又、都維那に補せられ、衆事を綱紀す」「山に依りて宇を構え、備く堂儀を設け、石を鑿ち□を疎き、洞室を宏開す」ともあるように、義紬と異なり、終生峽谷寺にあってその維持に努めた僧である。

峽谷寺の由來は北齊の文宣帝が僧達（天保七年—五五六—没）のために建立したことに始まる。前にも述べた道宣の訪問はその芳躅を慕うところにあつたが、『續高僧傳』によると、峽谷寺のある林慮山は特に北齊代以降、鄴都西方の山谷として都會の喧噪を嫌う僧侶にとって修行の適地であつたらしく、隋の曇遷や淨影慧遠は若い頃にここに入り、また修行に出會う以前の僧侶も僧稠に學んだ禪法を實踐している。峽谷寺は僧達以來の戒學の傳統の他、林慮山一帯が持つ禪定修行の地としての風氣に加え、唐代に至つても翻經僧を出すような經・論を學ぶ學問寺としての性格を備えていたものと思われる。

義紬の翻經僧としての活動は武周時代であつたが、それに續く中宗睿宗時代の長安・洛陽と相州との關係を示すものが、開元五年（七二七）建立の靈慧塔銘（釋文十）と天寶八載（七四九）の玄林神道碑（釋文十二）である。靈慧塔銘について先に

も述べたように、靈慧は相州の慈潤寺・大通寺を経て河南府佛授記寺の翻經大德感法師、即ち洛陽佛授記寺の德感の下に行き『解深密』・『法華』・『仁王』・『轉女身』・『梵網』等の經典、『成唯識』・『俱舍』等の論を學び、塔銘に記すように「敕を奉じて」佛授記寺留住が實現し德感の侍者になった。ここに言う「翻經大德感法師」は則天武后の革命を佛教側から畫策用意した薛懷義の一派として舊唐書（卷一八三・外戚、薛懷義傳）に名が残り、或いは革命を翼賛した寶雨經の譯場列位（長壽二年—六九三）に「佛授記寺都維那昌平縣開國公沙門德感筆受」とある德感に相違なく、従つて靈慧は華々しい武周時代の翻經事業のただ中に身を置いていたのである。その後、彼は相州大雲寺の律師教授に任ずる旨の牒を受けて故郷に歸っていたが、睿宗の景雲年間（七一〇—七一二）に再び都に呼び出され、故郷の大雲寺に歸ることが許されるまでの六年間を過ごしている。塔銘にはその頃のことを「聖善初めて成り……其の大德に充てらる」と言うのみで、具體的なことは述べられていない。⁽²⁸⁾

一方、玄林碑には龍興寺に出家して律を學んだ後、「依年受具」し靈泉寺の所屬となったことを記している。これを二〇歳の時の事と考えれば、それは上元二年（六七五）の頃のこととなる。次いで碑には中宗の景龍三年（七〇九）、玄散（靈泉寺の僧か）と共に敕命を受けて翻譯大德となったことを傳えている。但し都での活動については何等書かれておらず、靈泉寺歸還を願ひ出て許されたことを記すだけであるが、靈泉寺止住を凡そ六〇年と言っていること、僧臘七一とあることから、五四歳の頃から一〇年程の滞在であつたろう。

以上の塔銘・碑文によつて、則天武后の時代から中宗睿宗時代にかけて、長安・洛陽と相州とが主に翻譯事業を媒介に結び付いていたことが明らかになった。峠谷寺・靈泉寺はこれらの事からも律學を背景にした學場の性格を持っていたものと思われる。ところで當時の中央佛教界との關わりを考える上において重要なものに相州大雲寺の存在がある。大雲寺が則天武后によつて載初元年（六九〇）七月、諸州に各々設置され、その際、舊來の寺院を改稱する措置を取ったことは

よく知られているが、靈慧塔銘に言う大雲寺の前身については分らない。しかし周の長安二年（七〇二）に没した翌年、靈泉寺主智法師のために塔銘を刻んだ門弟の中に靈泉寺の僧と共に大雲寺の僧二人がいたこと、また靈慧が都から歸還後その「律師教授」に就き、義紆も同様に歸郷して峽谷寺主となった後、大雲寺の「法師教授」に任ぜられたと思われること等、大雲寺が靈泉寺、峽谷寺と密接な關係にあったことを知ることが出来る。「律師教授」「法師教授」が當時の寺院運営の組織上どのような位置にあったものかは全く分らないが、律師・論師等の専門分野を示す名稱を帯びて、出家者教育の衝に当たっていたものであろうか。もしそのような想定が許されるならば、全國に設置され、武周朝を翼賛する官立寺院としての大雲寺の性格に一致する任務を帯びていたであらう。則天武后の死後、唐朝復活を天下に示す意味をこめて、中宗の神龍元年（七〇五）に大唐中興寺設置の制が發布され、次いで同三年、それは龍興寺に改められた。この龍興寺の名も寶山石刻中に見ることが出来る。先に述べた「唐故方律師像塔之銘」と刻まれた玄方の塔銘によれば、そこに「年二十、元年、恩敕もて落髮し、龍興寺に配住せらる」とある。「元年」とはその没年から逆算して神龍元年となり、あたかも中興寺設置の年に當たる。正確に言えば、配せられたのは中興寺でなければならないが、開元一五年の起塔の時點で誤ったものであろうか。ところで先に述べた靈慧塔銘は同じく開元（五年）の起塔であるが、そこには明瞭に「大雲寺故大德」と刻まれている。従って大雲寺は、神龍三年の龍興寺設置以後も、相州安陽において併存していたと考えられる。

五 寶山塔銘における尼寺、尼僧、優婆夷

寶山石窟文に見える特徴の一つとしてあげられるものに、尼僧名の多さがある。近年の尼僧研究にも寶山石刻が利用されているように、唐代における纏まった尼僧例として貴重なものである。寶山石刻に見える尼寺は初めに述べたように

光天、聖道、清行の三寺であり、『寶山靈泉寺』によれば皆嵐峰山に属している。これらに對し靈泉、慈潤、報應、光嚴、願力、大雲、大慈の各寺は皆僧寺である。また大慈寺（「玄起（超？）法師灰身塔記」——無紀年銘No.8）が不明の他は皆寶山に属している。次に尼寺ごとにそこに見られる尼僧名（括弧内は造立者である弟子名）と、『寶山靈泉寺』において嵐峰山の編號がつけられた優婆夷（括弧内は造立者を示す）を列挙してみる。

○光天寺（嵐峰山） 貞觀：僧順・普相（弟子普潤・善昂・愛道）

永徽：大智（弟子妙因）・海徳

顯慶：妙徳（弟子妙意・寶素）・正信（弟子圓行）・智守（弟子僧慶）

（無紀年銘）：深□

○聖道寺（嵐峰山） 貞觀：靜感・善行・那延・圓藏（弟子遠行）・智海

永徽：明行・大信・大善・不詳（弟子開性）

顯慶：慧澄（弟子徳義）・僧愍（弟子法義）・妙信（弟子普明）・修行（弟子修惠・法力）

龍朔：不詳（弟子法□）・道藏（弟子善英）

乾封：善意（弟子法潤・知慧・法勝・善靜・法神）・善勝（弟子尙解・洁戎・善威・靜行・善道）

總章：法忍（弟子法周）

上元：本行

○清行寺（嵐峰山）（無紀年銘）：大苾芻尼智習

○優婆夷 貞觀：故清信女大申優婆夷（三女）・故清信女張優婆夷（出家女）

故清信女佛弟子范優婆夷（出家女）・張優婆夷姉妹



圖5 普相法師灰身塔題記 嵐峰山塔林

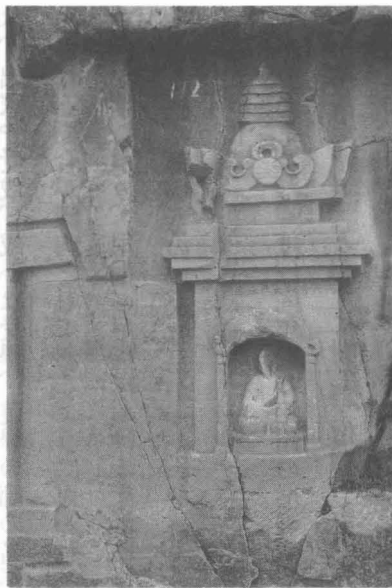


圖4 普相法師灰身塔 嵐峰山塔林



圖7 孫佰悅灰身塔銘 嵐峰山塔林



圖6 孫佰悅灰身塔 嵐峰山塔林

永徽：故清信佛子玉（男女等）・故粟優婆夷

顯慶：故大張優婆夷（出家女□□丘尼）

以上のように、靈泉寺を起點にして、西側の寶山と東側の嵐峰山とに男女の區分けがなされて、灰身塔が造られていたことが判然とする。但し、貞觀一五年の「故慧靜法師靈塔之銘」（嵐峰山25號・釋文二）や貞觀二十二年の慧休の塔銘（嵐峰山26號・釋文七）のように嵐峰山の區域に造られているものもあり、僧に關しては尼僧・優婆夷のような嚴然とした規則はなかったものとも考えられるが、この二例を除けば、他は皆寶山の區域にあるのであるから、上記のように結論してよいであらう。⁽³⁾嵐峰山にはこのように多數の塔銘が現存するにも拘わらず、比較的長い銘文を持つ者は尼僧では今回釋文を附した「光天寺故大比丘尼僧順禪師散身塔」（釋文一・圖3）・「光天寺故大比丘尼普相法師灰身塔」（釋文三・圖4・5）・「聖道寺故大比丘尼靜感禪師灰身塔」（釋文五）の三例に過ぎない。しかもこれらの銘文には、これまでに見て來た僧のそれに比べ、出家や受戒、或いは受學、遊學の師の名が記されていないという共通點がある。また塔銘の造立者に弟子、眷屬等と記される場合が傾向としてあるように思われる。單純な數字上の比較は慎まねばならないが、寶山の塔銘の中でも上記の三例を読む限り、尼僧の尼寺における生活は、僧寺における僧の活動に比べ地域的な廣がりにつけて、從つて人的な繋がりもより狭く薄いものになり易かつたのではなからうか。既に塚本善隆氏によつて指摘されているように、靈琛（五五四・六二八）、僧順（五五五・六三九）という三階教僧が止住した慈潤寺や光天寺には、他にも同様の僧尼がいた可能性がある。しかしここでは、ほぼ同年齡の相州の僧寺尼寺にいた二人でありながら、靈琛の塔銘には「後、禪師信行に遇い、更に當機の佛法を學ぶ」と記すに對し、僧順のそれでは五〇歳前後になつての三階教への轉回を「忽かに當根の佛法に遇う」と言うように、同じく「遇」字を用いながら具體的には記さないことを注意するに止めたい。

注

寶山の塔銘中、僧のものでは靈慧のように一族に出家者を持つ例が見受けられるが、尼僧にもこの例が見られる。例えば「聖道寺故大比丘尼靜感禪師灰身塔」(釋文五)に言う「姪女靜端・靜因」は同寺に住む出家者と思われ、優婆塞孫伯達の灰身塔(釋文六・圖6・7)には、彼に智覺と言う聖道寺に住む尼僧がおり、彼女が在家信者の亡父のために寶山に起塔した旨が刻まれている。他にも貞觀二二年の「故清信女佛弟子張優婆夷灰身塔」や「故清信女佛弟子范優婆夷灰身塔」、顯慶三年の「故大張優婆夷灰身塔」には出家した娘が亡母のために造ったことを記す塔記が残っている。

この優婆夷の活動に関しては、時代が下るものの、『安陽縣金石錄』卷五に著録されている北宋初期咸平四年の三種の造像記(「石刻目錄」No.97~99)がある。⁽³⁴⁾これらによれば、いずれも在俗の複数の女性信者によって造像活動が行われ、且つそれらは寶山の區域にあった。北宋初期においても、寶山石窟は、付近の村々の女性たちにとって、造像の功德を求める興福活動の場所でありつづけたと思われるが、男女の区分けの意識は或いはなくなっていたのかもしれない。

(1) 常盤大定・關野貞『中國文化史蹟』第五冊、同『解説』上第五冊(一九七五年四月 法藏館復刊)

常盤大定 「隋の靈裕と三階教の七階佛名」『支那佛教文化の種々相——石佛・石經について』(『支那佛教の研究』第一冊 一九七四年一月 名著出版復刊 所收)

塚本善隆 「三階教資料雜記」(『塚本善隆著作集』第三卷 一九七五年三月 大東出版社 所收)

(2) 『中國佛教史研究 第一』(一九八一年五月 大東出版社 所收)

(3) 楊寶順・孫德萱・衛本峰「河南安陽寶山寺北齊雙石塔」(『文物』一九八四年第九期) 河南省古代建築保護研究所「河南安陽靈泉寺唐代雙石塔」(『文物』一九八六年第三期、同「安陽寶山寺考古收穫」(『中

原文物』一九八七年第四期)、同「河南安陽靈泉寺石窟及小南海石窟」・丁明夷「北朝佛教史的重要補正——析安陽三處石窟的造像題材」(『文物』一九八八年第四期)

(4) 東西魏・北齊北周の兩都制については、谷川道雄「兩魏齊周時代の霸府と王都」(『唐代史研究會編』『中國都市の歴史的研究』 一九八八年五月 刀水書房 所收) 参照

例えば『洛陽伽藍記』序「暨永熙多難、皇輿遷鄴、諸寺僧尼、亦與時徙」(『同』卷五末「寺有一千三百六十七所、天平元年遷都鄴城、洛陽餘寺四百二十一所」)

なお塚本善隆「魏書釋老志の研究」第二 譯注篇・六二 東魏の佛教注(2) 参照

(5) 村田治郎「中國の帝都」第二章 鄴都考略(一九八一年四月 綜藝舎、

- (6) 諏訪義純『中國中世佛教史研究』第二章 東魏北齊佛教の研究（一九八八年五月 大東出版社）参照
- (7) 南北響堂山石窟については曾布川寛『響堂山石窟考』（東方學報 京都第六二冊）参照
- (8) 林縣峽谷千佛洞については曹桂岑・郭友范『林縣峽谷寺唐塔調查』（河南文博通訊）一九七八年第三期、張增午『林縣峽谷千佛洞造像調查記』（中原文物）一九八三年第四期 参照。なお峽谷は洪谷・峽峪・硤谷等と記されるが、以下本文中では峽谷を、資料から引用する際には資料のままの表記を用いる。
- (9) 馬忠理・張沅・程跌峰・江漢卿『涉縣中皇山北齊佛教摩崖刻經調查』（文物）一九九五年第五期
- (10) 以下については嚴耕望『唐代交通圖考』第五卷・河東河北區 篇四〇太行白陘道與穴陘道、篇四一 太行溢口壺關道（一九八六年五月 中央研究院歷史語言研究所專刊之八十三）参照
- (11) 山西省晉東南專員公署『上黨古建築』（一九六二年二月）参照
- (12) 前掲注（4）谷川論文（8）嚴耕望著書 一四三～四頁 参照
- (13) 谷川道雄『隋唐帝國形成史論』第三編 第四章 周末・隋初の政界と新舊貴族（一九七一年一〇月 筑摩書房）、拙稿『北朝末隋初における襄陽と佛教』（大谷大學眞宗總合研究所紀要 第五號 参照
- (14) 前掲注（1）常盤大定・關野貞『解說』上 第五冊 九一頁、『寶山靈泉寺』二三頁。
- (15) なお、前掲注（3）「安陽寶山寺考古收穫」でも、寶山寺が安陽一帶の名刹高僧の「死後の墓地」であると述べている。
- (16) 『續高僧傳』の慧休傳では、慧休の出自を「姓樂氏、瀛州人也、世居海濱、以蠶漁爲業」（大正五〇・五四四b）と記し、塔銘に記すところと甚だしく異なっている。後にも述べるように、道宣の記述には明らかに具體性があり、信憑性が高い。
- (17) 前掲注（1）塚本論文 二三八～四〇頁
- (18) 前掲注（1）常盤・關野『解說』上、注（2）牧田論文 参照
- (19) 『集神州三寶感通錄』卷中・東晉徐州太子思惟像緣第一三では「今在相州大慈寺」（大正五二・四一七b）とするが、『續高僧傳』卷二九・僧明傳では「今在相州鄴縣大慈寺也」（大正五〇・六九二b）と記している。なお『續高僧傳』において大慈寺に止住した僧として記録されている者は、卷二五感通上に開皇一四年の年次が記されている洪獻のみである。
- (20) 道宣が相州方面にしろした足跡については、藤善眞澄「道宣の遊方と二・三の著作について」（『三藏』一八九號：『國譯一切經』和漢撰述部史傳部第六卷月報）参照。なお曇榮（五五五～六三九）傳には彼が上黨・潞城・黎城（山西・黎城）の諸山を巡り、また韓州（山西・襄垣）にも足跡をのぼしていたことを記しているが、これらはいずれも前述した溢口陘の太行山脈西側の地域に當たる。
- (21) 『量處輕重儀』序 「有魏郡礪律師者、即亦一方名器、撰述文疏、獨步山東、因往從之、請詢疑滯」（大正四五・八五四a）
- (22) 『同』後批「獨有相州律師、制輕重相、言雖綸綜、還類古蹤」（大正四五・八五四a）
- (23) 道傑傳「開皇一九年、自衛適鄴、聽休法師攝論、又於洪律師所聽四分」（大正五〇・五二九a）
- (24) 義解篇論「世有慧休、即承裕緒、……人法斯具、慧解通微、章疏所行、誦爲珠璧」（同右・五四九c）
- (25) 「餘以親展微音、奉茲景行、猶恨標其大抵、事略文繁、以爲輕約耳」（大正五〇・五四五a）
- (26) 寶山と三階教との、特に靈裕の大住聖窟に見られる大集經月藏分・五五百年説、七階佛名、傳法二十四祖等、教理面での共通點を最初に指摘したのは常盤であるが、塚本は前掲注（1）論文において「慈潤寺故大靈琛禪師灰見塔銘」「光天寺比丘尼僧順禪師散身塔記」を邦文の論文として初めて紹介し、慈潤寺と三階教との關わりに注意している。

但し、僧順塔銘については、『河朔金石目』によって

僧順禪師舍利塔銘

僧順禪師散身塔記

を示し、前者は拓本を實見し、後者は「未だ拓本を見ず、またその文の録しているものを知らぬ」(二三〇頁)と言う。そのためか「光天寺を冠した唐の僧尼の墓塔」(同頁)と言い、僧順を「彼」と稱している(二二八・九頁)ように、光天寺・僧順が尼寺・尼僧であることが確認されていない。

(22)

僧稠傳「天保三年、下敕、於鄴城西南八十里龍山之陽、爲構精舍、名雲門寺、請以居之、兼爲石窟大寺主、兩任綱位、……今名光嚴寺是也」(大正五〇・五五四b・五五五a)

智首傳「大業之始、又追住大禪定道場……供事轉厚、彌所遺削、願以道穆帝里、化移關表、舊土凋喪、流紳靡依、乃抽撤什物百有餘段於相州雲門故墟、今名光嚴山寺、於出家受戒二所、雙建兩塔」(大正五〇・六一四c)

(23)

僧稠傳「隨初興復、奄同初構、……大業之末、賊所盤營、房宇才遺、餘皆焚蕩」(大正五〇・五五五b)

(24)

矢吹慶輝『三階教之研究』第一部 教史及び教籍史の「三階教史」に「開皇三年……相州光嚴寺僧信行……」

「開皇七年正月十日、相州光嚴寺沙門信行……」

という紀年を持つ信行遺文を紹介している(一一頁・一三頁)。ここに言う光嚴寺と、唐代の光嚴寺とどのような關係にあるのかははっきりしない。

(25)

前掲注(6)の調査報告によれば、蔡景には、他に「三尊眞容象支提龕銘」(開皇一九年)がある。

(26)

「述二大德道行記」には、『金光明經』『薩婆多律』『掌珍論』等三百餘卷を譯したと記す。前二者は義淨の譯であるが、『掌珍論』は玄奘の譯である。これは『掌中論』の誤りであろう。『金光明最勝王經』と

『掌中論』は長安三年(七〇三)長安西明寺にて、『根本薩婆多律攝』は久視元年(七〇〇)洛陽大福先寺において譯されている(『開元錄』卷九、大正五五・五六七a・五六八a)。

(27)

矢吹慶輝『三階教之研究』第三部附編 二、大雲經と武周革命(七四九頁)参照。なお、『大周刊定衆經目錄』卷一五末には「翻經大德佛授記寺主昌平縣開國公德感」とある(大正五五・四七五c)。

(28)

ここに言う聖善が、中宗睿宗朝に威を振るった慧範に關わる聖善寺であれば、「其の大德」とは聖善寺大德とも考えられるが、時期的に合わない。或いは翻經大德かも知れず、この文面では定かにならない。

(29)

塚本善隆「國分寺と隋唐の佛教政策並びに官寺」(『塚本善隆著作集』卷六 一九七四年四月)参照

(30)

『林縣志』では「補充□雲寺法師教授」となっている。ここでは假に大雲寺と解しておく。

(31)

但し、玄林碑にも、龍興寺の名が見える。玄林の没年から逆算して上元二年(六七五)の頃と思われるので、諸州に設置された龍興寺とは異なることが明らかである。

(32)

李玉珍『唐代的比丘尼』(一九八九年二月 臺灣學生書局)にも寶山石刻の一部が用いられている。

(33)

優婆塞については數こそ少ないが、その明確なもの六例を次ぎにあげてみる。これも大體は寶山に屬している。

貞觀：孫伯達・張文達・張希冲

永徽：故居士蕭儉・故優婆塞張客子

顯慶：故居信士呂小士

麟德：相州鄴縣萬春鄉綏德里住段王村劉才猷□才□父灰身塔記 乾封：相州安陽縣尉劉貴寶(これのみ「寶山靈泉寺」になし。)

右の中、特に麟德のものは、『涅槃』・『法華』・『維摩』・『金剛』等の經論の書寫讀誦を行った篤心の優婆塞であった亡父の爲に、靈泉寺西南一里に起塔する旨がその甥によって記されているものである。

(34)

『安陽金石錄』ではこれらの造像記は萬佛溝に在ると言っており、この萬佛溝については、『河朔訪古新錄』卷二にも

在西山者曰大住聖窟、隋開皇九年所造、窟外摩崖遍於山寺、麓西爲

萬佛溝、灰身塔記至數十百種、皆隋唐人刻也、

とあるように、寶山の塔龕群を指している。しかし常盤大定は『續古賢の跡へ』（『支那佛教史蹟踏査記』 國書刊行會 一九七二 所收 三五五～六頁）で、葉昌熾の『語石』に由來するとしてこの名稱を否定している。

本研究は、共同研究「六朝美術の研究」（班長 曾布川寛）の報告である。

〈釋文について〉

一 塔銘・碑文の釋文は當研究所に所藏する拓本にもとづいて行った。順序は没年に従っている。

二 靈琛塔銘の拓本は當研究所にない。また、既に塚本善隆氏の先述した論文中に收録されているが、寶山石刻に關係あるものとして参考のためここに付録した。訓讀は行っていない。靈裕大法師行記は中央部に大きく剝落があり、訓讀に困難であるため、これも今回訓讀を行わなかった。

三 釋文の中で、□は缺字を、△は當初からあった空格（例えば摩崖面に本來あった龜裂等のための空格）を、□は判讀不能を示す。則天文字には右傍に●を附した。

一 光天寺故大比丘尼僧順禪師散身塔 題記・塔銘

【釋文】

光天寺故大比丘尼僧順禪師散身塔
大唐貞觀十四季五月廿三日敬造／

僧順禪師者。韓州涉縣人也。俗姓張／氏。七歲出家。隨師聽學。遍求諸法卅／餘年。忽遇當根佛法。認惡推善。乞食／頭陀。道場觀佛。精懃盡命。嗚乎哀哉。／春秋八十有五。以貞觀十三年二月／十八日。

卒於光天寺。門徒巨痛。五内／□□。有緣悲慕。無不感切。廿二日。送／柩於屍陀林所。弟子等謹依林葬之／法。收取舍利。建塔於名山。仍刊石圖／形。傳之於歷代。乃爲銘曰。／

心存認惡。普敬爲宗。息緣觀佛。不憚／秋冬。頭陀苦業。積德銷容。捨身林葬。／鐫石紀功。／

僧順禪師は韓州涉縣の人なり。俗姓は張氏。七歳にして出家し、師に隨いて聽學し、遍えに諸法を求むること四十餘年、忽かに當根佛法に遇い、惡を認め善を推し、乞食頭陀し、道場に觀佛し、精懃にして命を盡る。嗚乎哀しいかな。春秋八十有五、貞觀十三年二月十八日を以て光天寺に卒す。門徒巨痛し五内□□。有緣のもの悲慕して感切せざるはなし。二十二日、柩を屍陀林所に送り、弟子等謹んで林葬の法に依り舍利を收取し、塔を名山に建て、仍て石に刊み形を圖き、之を歷代に傳う。乃ち銘を爲りて曰く、心、認惡に存し、普敬を宗と爲す。息緣觀佛、秋冬を憚めず、頭陀苦業、德を積みて容を銷す。捨身林葬、石に鐫り功を紀す。

二 唐故慧靜法師靈塔 題記・塔銘

【釋文】

唐故慧靜法師靈塔之銘／

法師諱慧靜。河東聞喜人也。俗姓裴氏。晉吏部／郎楷之裔胄。師幼

懷穎悟。器實澄明。信冠蓋如／浮雲。棄簪纓猶脫屣。年十有四。發志出家。望大／道而孤征。趣苦提而一息。至於三藏奧典。精思／幽求。十二△博文。討窮漁獵。於是鉤深致遠之／照。恬悅性靈。符幽洞玄之鑒。悵焉自逸。法師雖／復群經遍學。而十地偏工。伏膺有年。談塵方舉。／但以屬逢隋季偽教陵遲。紺髮金言。櫛風沐雨。／感斯流慟。悽斷傷心。遂輟聞思。盛修功德。經凡／一切。像集數軀。特造一堂。莊嚴供養爾。其雕樑／△△△畫棋。粉壁朱墀。像則鑿以丹青。經則闕／文續寫。豐△△功粗畢。景業且周。師寢疾彌留。／漸衰不愈。春秋△△△△△△△六十有九。／以大△唐貞觀十五年四△△△△△△△／月廿△三日。卒於寺所弟子△△△△△法演。早／蒙訓誘。幸得立身。陟帖衙恩。展申△誠孝。闍維／碎骨。遷奉靈灰。鑿鑿山楹。圖形起塔。銘諸景行。／寄此雕鐫。盛德徽猷。庶傳不朽。△其銘曰。

奕葉冠蓋。蟬聯世襲。有覺煩籠。簪纓羈縻。四生難寄。三／寶傷依。通人憬悟。落髮爰歸。戒定慧△。聞思克勵。彼岸／未窮。奄辭人世。孝誠追感。圖形畫像。顒觀神儀。時申敬／△。山虛谷靜。松勁風△。勒諸巖岫。永播鴻名。／

*塚本善隆「三階教資料雜記」では、惕心を傷心に、偽教を像教に作る。

唐故慧靜法師靈塔の銘

法師、諱は慧靜、河東聞喜の人なり。俗姓は裴氏。晉の吏部郎楷の裔なり。師、幼くして穎悟を懷き、器實澄明、冠蓋に信ることほ浮き雲の如く、簪纓を棄つること猶お屣を脱ぐが如し。年十有四にして志を發して出家し、大道を望んでは孤り征き、菩提に趣いては一たび息む。三藏の奥典に至りては精思幽求し、十二の博文は討窮漁獵す。是において鉤深致遠の照、恬として性靈を悦こび、符幽洞玄の鑒、悵焉として自逸す。法師、群經遍く學ぶと雖復も、しかれども十地偏えに工みにして、伏膺すること年あり、談塵方に舉がる。

但、たまたま隋季に、偽教陵遲するに逢うを以て、紺髮金言、櫛風沐雨、斯れに感じて流慟し、悽斷惕心たり。遂に聞思を輟め、盛んに功德を修む。經は凡そ一切、像は數軀を集め、特に一堂を造り、莊嚴供養するのみ。其れ樑に雕み棋に畫き、粉壁朱墀、像は則ち鑿るに丹青を以てし、經は則ち闕文あれば續ぎ寫す。豐功、粗々畢り、景業、且に周らんとし、師、疾に寢ねて彌留し、漸く衰えて愈えず。春秋六十有九なり。大唐貞觀十五年四月廿三日を以て、寺所に卒す。弟子法演、早に訓誘を蒙り、幸いに立身を得たり。帖に陟り恩を銜み、誠孝を展申す。闍維し碎骨し、遷して靈灰を奉じ、山楹に鑿ち鐫り、形を圖きて塔を起て、諸々の景行を銘し、此の雕鐫に寄せ、盛徳と徽猷と、庶くは不朽に傳えん。其の銘に曰く、

奕葉の冠蓋、蟬聯世襲するも、煩籠を覺るあり、簪纓は羈縻なりと。四生寄り難く、三寶依り傷し。通人憬悟し、落髮して爰に歸す。戒

定慧[?]、聞思して克勵するも、彼岸未だ窮まらざるに、たちまち人世を辭す。孝誠追感し、形を圖き、像を畫き、顚^{たふ}んで神儀に觀え、時に敬[?]を申ぶ。山虛しく谷靜かにして、松勁風[?]。これを巖岫に勒^きみ、永く鴻名を播かん。

三 光天寺大比丘尼普相法師灰身塔 題記・塔銘

【釋文】

光天寺故大比丘尼普相法師灰身塔／
法師俗姓崔。博陵人也。祖父苗裔。本出定州。因仕分居。遂△／留相部。年十有二。落髮玄門。一入僧徒。志操安△靜。處於衆／侶。卓尔不群。年滿進戒。學律聽經。精懃△△未久。律文通利。／講宣十地維摩兩部妙典。法師△意欲啓△般若之門。開無／爲之路。運乘大宅。舟△△航愛河。遂△使道俗慕欽。衆徒歸／仰。但滅△△本不滅。生亦不生。□無爲心。示有爲法。春秋七／△十有八。大唐貞觀十七年八月四日。遷神於光天寺所。弟／子等哀慧日之潛暉。痛慈燈之永滅。乃依經上葬。收其舍利。／粵以貞觀十八年歲次甲辰十一月十五日。於此名山。鑄高／崖而起塔。寫神儀於龕內。錄行德於席側。觀劫盡山灰。形名／久嗣。乃爲銘曰。邊彼遙津。萬古紛綸。會燃智炬。乃滅煩薪。／捨恩棄俗。入道求真。持律通經。開悟無聞。松生常翠。竹挺恆／青。如何法匠忽尔將傾。近雕素石。遠署嘉聲。千秋萬古。留此／芳名。弟子普閭善昂愛道及諸同學等。爲亡師

敬造。／

光天寺故大比丘尼普相法師灰身塔

法師、俗姓は崔、博陵の人なり。祖父苗裔は、本、定州に出で、仕うるに因りて分居し、遂に相部に留まる。年十有二にして玄門に落髮し、一たび僧徒に入るや、志操安靜、衆侶に處りて、卓爾として群せず。年、進戒に滿ち、律を學び經を聽き、精懃未だ久しからずして、律文に通利し、十地維摩兩部の妙典を講宣す。法師、般若の門を啓き、無爲の路を開き、運、大宅に乗り、舟、愛河を航らんと意欲す。遂に道俗をして慕い欽び、衆徒をして歸仰せしむ。但、滅は本より不滅、生も亦不生、無爲の心を（以て）、有爲の法を示す。春秋七十有八にして、大唐貞觀十七年八月四日、光天寺所に遷神す。弟子等慧日の暉きを潜むるを哀しみ、慈燈の永えに滅ゆるを痛み、乃ち經に依り、上葬して、其の舍利を收む。粵に貞觀十八年歲次甲辰十一月十五日を以て、此の名山において、高崖を鑄ち塔を起て、神儀を龕内に寫し、行徳を廟側に錄す。觀わくば、劫、山灰に盡き、形名久しく嗣がれんことを。乃ち銘を爲りて曰く、彼の遙津を過り、萬古紛綸たり。會に智の炬を燃やし、乃ち煩の薪を滅す。恩を捨て俗を棄てて、道に入り眞を求む。律を持し經に通じ、無聞に開悟す。松は生えて常に翠く、竹は挺えて恆に青し。法匠忽爾として將て傾くを如何せん。近くは素石に雕り、遠かに嘉聲を署し、千秋萬古に

四 報應寺故大海雲法師灰身塔 題記・塔銘

報應寺故大海雲法師灰身塔
大唐貞觀廿季四月八日敬造

大雲法師。俗姓王氏。／南東郡白馬人也。枝分洛浦。葉散錦京。
 得姓表名。興於中古。法師以形同泡沫。身若電。慮苦海而難超。
 山之亘越。年登二九。因得法師。遂釋髮縉門。高參法侶。可謂
 志烈。心始石。洞幽。因果。故崖岸
 峻。遠壑百川而不溢。里端而莫窮。
 上化來法。受具受業。爲師爲範。護戒甚浮囊。墓
 博。偏練結。玄。則僧徒霧集。扒理窟
 奔。是智凡。悟。古無。沈溺設此
 津梁之刺元。彼岸不明。光俗。從
 使控鵠鸞之洛。／
 十有。六十三臘。於大唐貞觀十九。十二。
 灰身闍維起塔。／

□□上元□□二爲初分□氣流形、五才創めて立ち、性靈百品、略に
 して言うべし。大雲法師、俗姓は王氏、□南東郡白馬の人なり。枝
 は洛浦に分かれ、葉は鎬京に散り、姓を得、名を表し、中古に興る。
 法師以えらく、形は泡沫に同しく、身は電□の若く、苦海の超え難
 きを慮い、□山の越え匠きを□う。年二九に登り、因りて法師を得、
 遂に髪を緇門に釋き、高く法侶に參わる。謂うべし、志烈□□□
 □□心始□石□□□洞幽□□因果。故に□崖岸峻、遠く百川
 を壅ぐも溢れず、□□里□□端而莫窮、□□□□□□□□□□
 上□化來□□法、受具し業を受け、師となし、範と爲す。護戒□甚
 浮囊、墓□□□博□□偏練□結□□玄□、則ち僧徒霧集し、
 机□理窟□□□奔、是智凡□□□悟□□□古無□□□□□□
 □沈溺設此津梁之刺□元□□彼岸不明□□□光□俗□□□□□
 □□從使控鶴□鸞之洛□□□□□□□□□□□□□□□□□□
 十有□、六十三膈。大唐貞觀十九□□□□□□□□□□十二□□□□
 □□□□□□□灰身闍維し起塔す。

五 聖道寺故大比丘尼靜感禪師灰身塔 題記・塔銘

聖道寺故大比丘尼靜感禪師灰身塔／
禪師諱靜感。□□△△△□氏。隴西燉煌人。遠祖從官魏國。因以家
焉。若△△乃崇基極／天。長源谷□。□傳△△世。襲紹紳譜。孝敬

之基。詎待觀縷。禪師風△神秀朗。容範△△端莊。／殖德本於常季。積△△妙因於前△業。齟齬之歲。已高蹈玄門。童稚之辰。遂栖心覺路。△即／誦維摩經无量壽△經勝鬘經。轉一切經一遍。夕晨無暇。誦習如流。年登廿。進受具戒。遂聽／律五。周僧祇四分△之說。制事斷疑。無不合理。至世捨散善之不修。求第一妙宗。庇身禪衆。／

高參勝侶。學月殿△雲經實躬之業。三空五淨。竝得禪名。潔行精微。志成懇惻。糞掃爲服。聊／以外御風霜。麻麥爲食。纔充飢渴。形同槁木。心若死灰。見之者去殃。聞之者遣障。可謂釋門／之龍象。法侶之駕△鴻者也。禪師負杖逍遙。息焉親疾。梵響悲深。鐘聲哀急。遷神從化。八十／有六。六十五夏。貞△觀廿年三月廿一日。終於聖道寺。可謂釋種福盡。再唱空虛。悲威德者。／涕流沾衿。□善△人者僻身員木。姪△女靜端靜因及門徒等。祥收舍利。嗚／咽血言。鏤山爲塔。刊石爲文。冀通万古。庶不朽焉。／

聖道寺故大比丘尼靜感禪師灰身塔

禪師、諱は靜感、□□□氏。隴西燉煌の人なり。遠祖、魏國に官するにより、因て以て家す。乃ち基いを極天に崇くし、源を合□に長くするが若きは、□傳△△世、縉紳の譜を襲ぐ。孝敬の基、詎ぞ觀縷を待たんや。禪師、風神秀朗、容範端莊、徳本を常年に殖え、妙因を前業に積み、齟齬の歳、已に高く玄門を蹈み、童稚の辰、遂に心を覺路に栖ましむ。即ち維摩經、無量壽經、勝鬘經を誦え、一

切經を轉すること一遍。夕晨にも暇なく、誦習流るるが如し。年、二十に登り、進んで具戒を受け、遂に律を聴くこと五たび、僧祇・四分の説に周し。事を制め疑いを斷ちて理に合わざるはなし。三十に至り、散善の不修を捨て、第一妙宗を求め、身を禪衆に庇り、高く勝侶に參ず。學月殿雲經實躬之業（不詳）、三空五淨、竝に禪名を得、潔行は精微にして、志は懇惻を成す。糞掃を服と爲し、聊か以て外は風霜を御し、麻麥を食と爲し、纔かに飢渴に充るのみ。形は槁木に同じく、心は死灰の若し。之を見る者は殃いを去り、之を聞く者は障りを遣る。釋門の龍象、法侶の駕鴻と謂うべき者なり。禪師、杖を負いて逍遙し、息焉として疾に親しみ、梵響の悲しみ深く、鐘聲の哀しみ急にして、遷神、化に従う。八十有六、六十五夏なり。貞觀二十年三月二十一日、聖道寺に終る。釋種の福盡き、再び空虛に唱うるものと謂うべし。威徳を悲しむ者、涕流衿を沾おし、□善人は身を員木に僻く。姪女靜端・靜因、及び門徒等、祥いに舍利を收む。嗚咽血言し、山に鏤りて塔を爲り、石に刊みて文を爲る。冀わくは萬古に通じ、庶わくは不朽ならんことを。

六 故大優婆塞晉州洪洞縣令孫伯悅灰身塔銘

【釋文】

故大優婆塞晉州洪洞縣令孫伯悅灰身塔銘／
優婆塞姓孫。字伯悅。相州堯城人也。世衣纓苗裔無／墜。身居薄官。

情達苦空。每厭塵勞。心希彼岸。雖處居／家。不願三界。見有妻子。常忻梵行。悅去隋朝身故。未／經大殯。悅有出家女尼。字智覺。住聖道寺。念父生育／之恩。又憶出家解脫之道。不重俗家遷葬。意慕大聖／泥洹。今以大唐貞觀廿年十月十五日。起塔於寶山／之谷。冀居婆塞之類。同沾釋氏之流。今故勒石。當使／劫盡年終。表心無墜。善哉善哉。乃爲銘曰。／

哲人厭世。不貴俗榮。苦空非有。隨緣受生。身世磨滅。／未蘭雄英。高墳曠壟。唯矚荒荆。且乖俗類。同彼如行。／俱知不善。唯願明明。

故大優婆塞晉州洪洞縣令孫伯悅灰身塔銘

優婆塞、姓は孫、字は伯悅、相州堯城の人なり。世々衣纓にして苗裔隆ちるなし。身は薄官に居るも、情は苦空を達り、毎に塵勞を厭い、心は彼岸を希う。居家に處るといへども、三界を願わず。いま妻子あるも、常に梵行を忻ぶ。悅、去る隋朝に身故せり。未だ大殯を経まず。悅に出家の女尼あり。字は智覺。聖道寺に住す。父の生育の恩を念い、又、出家解脫の道を憶い、俗家の遷葬を重んぜず、大聖の泥洹を意い慕う。今、大唐貞觀二十年十月十五日を以て、塔を寶山の谷に起て、(優)婆塞の類に居り、共に釋氏の流に沾わんことを冀う。今、故に石に勒み、當に劫盡き年終るまで、心を表して墜ちることなからしめんことを。善き哉、善き哉。乃ち銘を爲り

て曰く、

哲人世を厭い、俗榮を貴ばず。苦空非有、緣に隨いて生を受く。身世磨滅するも、未だ雄英を簡はず。墳を高くし壟を曠くするも、唯、荒荆を矚るのみ。且らく俗類に乖れ、かれと同一に如き行かん。俱に不善を知り、唯、明明なるを願うのみ。

七 慈潤寺故大慧休法師灰身塔 題記・塔頌・刻石記德文

【釋文】

慈潤寺故／大慧休法／師灰身塔／

貞觀廿一／季四月八／

塔頌／

佛日潛暉。明人應世。是曰法師。照除昏蔽。始涉緇門。方爲師導。聽覽忘疲。／精窮內奧。眞如顯悟。三乘指掌。負[?]雲奔。諮承渴仰。匠益既周。玄談且歇。／置亭几[?]。形隨盡月。羅漢灰身。那含寂定。今乃闡毗。宗承先聖。建茲靈塔。／記德留名。覬超劫火。此石常貞。門徒攀覽。道俗[?]哀。不勝戀慕。捫淚徘徊。／

慈潤寺故大論師慧休法師刻石△記德文 法師諱慧休。河間平舒人也。俗姓樂氏。晉大夫樂王鮒之後／焉。僕射之剛正抗直。恥素餐於

漢朝。吏部之△清白貞淳。飛英聲於晉室。衣纓毫彥。可略而不言。法師夙樹／勝因。早膺妙果。文學讓梨之歲。志在出塵。△陸續懷橘

之年。便欣入道。及天仙接髮之日。卽事靈裕法師。爲息慈弟子。

□聽明慧。勤於藝業。每披覽經。論不俟研。求一經於心。莫不怡然理順。雖仲任之閱市默記。正平之背碑聞寫。方之上人。彼所多媿。

始受業於僧樹律師。習毗尼五△部。星紀末周。卽洞曉玄妙。遂廼馳驚三藏。遨遊十門。修多蠹露之文。龍樹△馬鳴之說。莫不剖析豪釐。窮盡陳秘。於是勝幢斯建。法輪遂轉。懷經負△笈者。靡△勞

於△舍。△△△請益質疑者。不憚勤於千里。於△是門徒濟濟。學侶訛說。同萬流之歸渤△渢。類衆△之環滅△△極。法師所製。十

地地持義記。成實論義章及疏。毗婆沙論。迦旃延經。雜阿毗曇等／疏。小乘△。△△攝△大乘論義疏。又續遠法師華嚴疏。又著大乘義

章。凡卅八卷。竝皆探頤玄宗。敷通幽捷。／暢十誦之△△典。演五時之精義。其辭□而旨微。其文華而理奧。誠先達之領袖。寔後賢之

冠冕。及開講解／釋。辯若懸△河。聽之者忘△△疲。嗅之者心醉兮。時天下寧宴。佛日載明。龍鳥問望。風塵相接。各樹勝幢。俱／鳴△

△法鼓。法師儼然高△△視。擅名當世。雖弘論未交。則望塵而旗靡。辭鋒纔接。亦濯然而轍亂。於是昇／其△堂者。如承慧解之談。入△

其室者。似宿傳燈之說。由是茂實嘉名。騰芬於函夏。貞觀八季。奉／詔。召入京都。法師季將九十。志性沈靜。深憚喧嘩。乃

辭以老病。得停遠涉。慈潤僧坊。屢有災火。每將發之際。／卽有善神。來告法師。令爲火防。如此數四。以有備獲免。靈泉道場。自齊亡

之後。堂閣朽壞。水泉枯竭。荊棘荒／蕪。果經歲訖。至開皇三季。

始加脩復。法師躬自開剪。招引僧徒。乃歎曰。伽藍雖建。山寺無水。

經行法侶。豈得／安居。於是思惟深念。不過信次。飛泉奔涌。災火

不焚。無假樂巴之術。枯泉自溢。豈藉耿恭之拜。此固法師業／行所致。精誠所感。法師每至啓蟄之後。墮戶之前齋供。乃絕於蔬菜。欲

有所之。手執長筭。掃地方行。惟恐食／踐有生。損傷物命。大慈大悲。念念相續。爰始髻鬣。終乎耆壽。德素△之美。微猷日新。雖十

業之心已淨。未出／生死之流。百季之期斯盡。遂見花萎之相。貞觀廿季歲次敦牂季春旬有五日。法師藻嗽訖。因右脅而臥。又／□□念。

色貌如常。出息難保。奄然遷化。春秋九十有九。夏臘七十有七。卽以其月廿日。遷窆於安陽縣西之／△靈泉山。法師△金剛之性堅固不

染。戒行圓滿。明淨無瑕。博綜羣典。詠玄窮妙。視怨親惟一相。達生滅之／□□□□□□□□□□。湛然而已。使持節揚州都督相州刺史越王。以開士乃佛法之棟梁。衆生之津濟。奄損／□□言□□△△△

命詞人。式昭景行。乃爲文曰。／

□□□界之輪迴。念四生之沈溺。沒愛河而不懼。玩火宅而無惕。識莫寤於眞假。智常昏於動寂。何大覺之／□□□□大法於大千。示三

車之快樂。寔六趣之福田。雖慧日之暫隱。乃慧炬而猶傳。彼上人之應跡。暢微／□□。言之遺旨。開不二之法門。闡會三之妙理。□威儀與器度。信卓然而高視。惟諸行之無常究竟／□□□□寂滅。痛哲

人之云逝。刊玄石而記烈。雖陵遷而海變。恕微音之無絕。／□□□□越王府文學宋寶奉□教□撰。／

慈潤寺故大慧休法師灰身塔

貞觀二十一年四月八(日)

塔頌

佛日暉きを潛め、明人世に應ず、是を法師と曰う。昏蔽を照除し、始めて縋門に涉り、方に師導を爲す。聽覽疲るるを忘れ、内奥を精窮し、眞如は顯かに悟り、三乗は掌を指すがごとし。負雲奔し、諮承渴仰し、匠益既に周ねく、玄談且つ歇む。置亭几、形は盡月に隨う。羅漢の灰身、那含の寂定なり。今、乃ち闍毗し、先聖を宗承す。茲の靈塔を建て、徳を記し名を留む。覲わくは劫火を超えて、此の石常に貞しからんことを。門徒攀覽し、道俗哀して、戀慕に勝えず、涙を捫えて徘徊す。

慈潤寺故大論師慧休法師刻石記徳文 法師、諱は慧休、河間平舒の人なり。俗姓は樂氏。晉の大夫樂王鮒の後なり。僕射の剛正抗直は素養を漢朝に恥じ、吏部の清白貞淳は英聲を晉室に飛ばす。衣纓髦彦、略して言わざるべし。法師、夙に勝因を樹て、早に妙果を膺け、文學讓梨の歳に志は出塵に在り、陸續懷橘の年に便ち入道を欣ぶ。天仙接髮の日に及んで、即ち靈裕法師に事えて息慈の弟子と爲る。□聽明慧、藝業に勤む。經を披覽する毎に、論は研めるを俟たず、一經を心に求めて、怡然として理順ならざるはなし。仲任の市に閱て默記し、正平の碑を背して聞寫すと雖も、之を上人に方ぶるに、彼

は多く婉る所なり。始めて業を僧樹律師に受け、毗尼の五部を習う。星紀未だ周らざるに、即ち玄妙に洞曉し、遂に迺ち三藏に馳騫し、十門に邀遊し、修多蠹露の文、龍樹・馬鳴の説は、豪釐を剖析し陳秘を窮盡せざるはなし。是において勝幢斯れ建ち、法輪遂に轉じ、經を懷ろにし笈を負う者は、靡勞於舍、請益して疑いを質す者は千里に勤むるを憚らず。是において門徒濟濟、學侶訖説たること、萬流の渤海に歸するに同しく、衆の滅極を環るに類す。法師の製る所は、十地・地持の義記、成實論義章及び疏、毗婆沙論・迦旃延經・雜阿毗曇等の疏、小乗、攝大乘論義疏、又續遠法師華嚴疏、又大乘義章(の疏)を著わす。凡そ四十八卷なり。竝に皆玄宗を探赜し、幽捷に敷通し、十誦の典を暢べ、五時の精義を演ぶ。其の辭、□にして旨は微く、其の文、華にして理は奥し。誠に先達の領袖、寔に後賢の冠冕なり。開講し解釋するに及べば、辯は懸河の若く、之を聽く者疲るるを忘れ、之を喰う者心酔す。時に天下寧宴、佛日載ち明かにして、龍鳥問望し、風塵相接ぎ、各々勝幡を樹て、俱に法鼓を鳴らす。法師、儼然として高視し、名を當世に擅にす。弘論未だ交らずと雖も、則ち塵を望んで旗靡き、辭鋒纔かに接して、亦濯然として轍亂る。是において其の堂に昇る者は、慧解の談を承くるが如く、其の室に入る者は傳燈の説を寤るが似し。是れに由つて茂實嘉名、函夏に騰芬す。貞觀八年、詔を奉じ、京都に召入せらるるも、法師、年將に九十ならんとし、志性沈靜、深く喧嘩を憚る。乃

ち辭するに老病を以てし、遠く渉るを停むを得たり。慈潤の僧坊、屢々災火有り。毎に將に發らんとするの際、即ち善神有り、來りて法師に告げ、火防を爲さしむ。此くの如きこと數四、以て備え有りて免るるを獲たり。靈泉道場は齊亡びてよりの後、堂閣朽壞し、水泉枯竭し、荆棘荒蕪、歲訟を累經す。開皇三年に至り、始めて脩復を加え、法師躬自ら開剪し、僧徒を招引す。乃ち歎じて曰く、伽藍は建つと雖も山寺に水無し。經行の法侶、豈に安居を得んやと。是において思惟深念し、信次を過ぎざるに飛泉奔涌す。災火に焚けざるは、藥巴の術に假る無く、枯泉自のずから溢るるは、豈に耿恭の拜に籍らんや。此れ固り法師の業行の致す所、精誠の感する所なり。法師、毎に啓蟄に至りての後、塹戸の前に齋供す。乃ち蔬菜を絶ち、之く所有らんと欲すれば、手に長帶を執り、地を掃きて方めて行く。惟、有生を食らい踐み、物命を損傷せんことを恐るるのみにして、大慈大悲、念念相續ぐ。爰に髻鬘より始まり耆壽に終わるまで、徳素の美は、黻猷日に新たなり。十業の心已に淨しと雖も、未だ生死の流より出でず。百年の期斯に盡き、遂に花萎むの相を見わす。貞觀二十年歲次敦牂季春旬有五日、法師、藻嗽し訖り、右脅に因りて臥し、又□□念、色貌常の如し。出息保ち難く、奄然として遷化す。春秋九十有九、夏臘七十有七なり。即ち其の月二十日を以て、遷して安陽縣西の□靈泉山に窆むる。法師、□金剛の性堅固にして染まらず、戒行圓滿、明淨にして瑕なし。羣典を博綜し、玄を詠み妙を

窮め、怨親を視るに惟一相、達生滅之□□□□□□□□間、湛然たるのみ。使持節・揚州都督・相州刺史越王、開士は乃ち佛法の棟梁、衆生の津濟、奄損□□を以て、言□□、詞人に命じて式て景行を昭らかにせしむ。乃ち文を爲りて曰く、

□□界の輪廻を□、四生の沈溺するを念う。愛河に没して懼れず、火宅を弄んで傷るなし。識は眞假を寤るなく、智は常に動寂に昏し。何ぞ大覺の□□□□大法於大千、三車の快樂をしめすは、寔に六趣の福田なり。慧日の暫らく隱ると雖も、乃ち慧炬の猶お傳わるがごとし。彼上人の應跡は微を暢べ□□、之を遺旨に言い、不二の法門を開き、會三の妙理を闡かにす。威儀と器度とを□、信に卓然として高視し、惟諸行之無常究竟□□□□寂滅。哲人の云に逝くを痛み、玄石に刊みて烈しを記す。陵遷りて海變すと雖も微音の絶ゆるなきを恕されんことを。□□□□越王府文學宋寶奉□教□撰。

八 大唐願力寺故瞻法師影塔之銘并序

【釋文】

大唐願力寺故瞻法師影塔之銘并序／

夫大士遊心。必歸先覺之境。高人建徳。要開後覺之門。所以攝倒海而就安波。湛圓空而收動界。其有出生五滓。駕御□□。□□□□之／辰。作世間之□燭者。其唯我上人乎。上人諱神瞻。俗姓邵氏。相州安陽人也。其先有周太保北燕伯邵公奭之後。上□□□□□代爲

／冠族。厥宅不移。碑表列於墳塋。譜牒傳於家國。今此不復詳談矣。
曾祖日碑。齊任司州刺史使持節行軍總管諸軍□□□□。隨任／平
州盧龍縣令兼檢校盧龍鎮將。父琰。唐任晉州神山縣尉。日諷萬言。
三業相承。聲馳宇內。惟文與武併在一門。□□□□□□□□／靈賢
族。金精玉骨。卓絕常倫。日誦五千言。工屬文善談吐。年廿一。遍
閱九經。備開三史。泛覽諸子。涉獵羣書。陰陽圖□□□□術之／
說。莫不咸陳掌上。搥納胸中。以爲竝是糟粕之餘詞。羶腥之陋業。不
足以揚眉闊步。畢志息心。解纓絡於寰中。縱解□□□□□□意營
／道。迴向釋門。投毗曇□師智神。寺主作一邊依止。於是載聽中論。
且學小乘。入理致即。鏡寫精微。演法相□□流名□□□□□□。
元／年。軍東山之慶。爰啓度門。刺史許平恩。妙體一乘。先通三論。
傾風見悅。高預染衣。於是更就硃谷操禪師。鍊磨戒品。自此律行弥
嚴。溫□／轉富。講四分律竝羯磨維摩法華金剛般若勝天王般若護國
仁王般若。及中論毗曇。馳驟兩乘。包羅三藏。橫五堅五之義。三車
九轍之／途。不思議之奧宗。無住相之深旨。花貫泉涌。雨澍雷驚。
法澤所加。枯悴者莫不霑潤。心燈所耀。黑暗者咸生承光。廿年。閒爲
佛法將。紹隆／饒益。胡可勝談。又以講誦之□。□□□□之暇。撰正像
住持同異論一卷。浮圖澄法師碑文一首。□定琬寺主碑文一首。更有
諸餘雜文數首。／竝事在光場。不之繁目。□□□□□□。終告化。春
秋卅三。以大唐垂拱二年四月十二日端拱脫生。夏凡廿。嗚呼哀哉。
雖靈心湛然。去留／無在。而世間攀戀有勳。□□□□□□□□十人等。

追慕教緣。以大周天授二年四月八日。於相州城西五十里寶山別谷。
敬焚靈骨。起塔／供養。式圖影像。遂勒銘□。／

伊大人之處世兮。寔在□□□□□□。□□□□之開心兮。亦橫舟而俯度。
架三界之天梁兮。杜四生之險路。作眞諦之耿光兮。爲末法之弘□。

其／我族姓之尊者兮。□□□□□□□□。三有之危界兮。陋萬卷

之浮言。超埃塵而遐騰兮。建勝義之高幟。宣法王之正教兮。洗濁世
之／諠煩。其。彼利益之云周兮。就後代而長往。玄構落而瞻依兮。

法日墜而安仰。踰絕嶠以閱塔兮。因崇巖而鑲像。留銘頌於山阿兮。

庶芳／風之□響。其。／

*京都大學人文科學研究所藏石刻第9輯61函—62—A Bの中、Bは
各行末一字を缺き、Aは各行末七、八字を缺く。缺字の部分は『寶
山靈泉寺』によつて補つた。

大唐願力寺故瞻法師影塔の銘并びに序。

夫れ大士心を遊ばせ、必ず先覺の境に歸し、高人徳を建て、要す後
覺の門を開くは、倒海を擣めて安波と就し、圓空を湛えて動界を收
むる所以なり。其の五洋に出生し□□□□に駕御し、□□□□之辰に□し、
世間の□燭を作す者あるは、其れ唯我が上人なるか。上人、諱は神
臈、俗姓は邵氏。相州安陽の人なり。其の先は有周の太保・北燕伯
邵公爽の後なり。上□□□□□□代々冠族たりて、厥の宅移らず。碑
表は墳塋に列ねられ、譜牒は家國に傳えらる。今此に復た詳談せず。

曾祖日碑、齊のとき司州刺史・使持節・行軍總管諸軍□□□□□に
 任じ、隨のとき平州盧龍縣令・兼檢校盧龍鎮將に任ず。父琰、唐の
 とき晉州神山縣尉に任ず。日々萬言を諷し、三業相承け、聲は宇内
 に馳せ、惟れ文と武と併せて一門に在り。□□□□□□□靈賢族、
 金精玉骨、常倫に卓絶す。日々五千言を誦し、工に文を屬り、談吐
 を善くす。年二十一にして遍く九經を閲み、備く三史を開き、諸子
 を泛覽し、羣書を涉獵す。陰陽圖□□□、□□□術の説は咸く掌上
 に陳べ、捲て胸中に納れざるはなし。以爲えらく、竝是れ糟粕の餘
 詞、羶腥の陋業にして、以て眉を揚げて闊歩し、志を擧げて心を息
 ましむるに足らずと。纓絡を囊中に解き、縦解□□□□□意營
 道、釋門に迴向し、毗曇圖師智神、寺主として一邊を作す、に投じて
 依止す。是において載ち中論を聴き、且つ小乘を學び、入理致即、
 精微を鏡寫し、演法相□□□□□、□□□、聖國元年、東山の慶を
 覃およぼし、爰に度門を啓く。刺史許平恩、妙く一乘を體し、先に三論
 に通じ、風を傾け悦びを見わし、高く染衣に預る。是において更に
 硤谷の操禪師に就いて戒品を鍊磨す。此れより律行彌々嚴にして、
 溫□轉た富めり。四分律苾芻に羯磨・維摩・法華・金剛般若・勝天王
 般若・護國仁王般若、及び中論・毗曇を講じ、兩乘に馳驟し三藏を
 包羅す。横五豎五の義、三車九轍の途、不思議の奧宗、無住相の深旨
 は、花貫き泉涌き、雨澍ぎ雷驚かし、法澤の加わる所に、枯悴の者
 霑潤せざるはなく、心燈の耀す所に、黑暗の者咸く承光を生ず。二

十年間、佛法の將たりて饒益を紹隆す。胡ぞ談るに勝るべけんや。
 又講誦の□、□□の暇を以て、正像住持同異論一卷・浮圖澄法師碑
 文一首・□定琬寺主碑文一首を撰す。更に諸餘の雜文數首あり。竝に
 事は光揚に在り、不之繁目、□□□□、□終に化を告ぐ。春秋四
 十三。大唐垂拱二年四月十二日を以て端拱蛻生す。夏は凡そ二十な
 り。嗚呼哀しいかな。靈心湛然として、去留在るなしと雖も、世間
 攀戀して慟くあり、□□□□□□□十人等、教縁を追慕し、大周天
 授二年四月八日を以て、相州城西五十里の寶山の別谷において、敬
 しんで靈骨を焚き、塔を起てて供養し、式しんで影像を圖き、遂に
 銘を勒みて□く、

伊れ大人の世に處するや、寔に在□□□□、□□□之開心兮、亦横
 舟にして俯度す。三界の天梁を架け、四生の險路を杜ぎ、眞諦の耿
 光を作し、末法の弘□を爲す。其の二。我族姓の尊者、□□□□
 □、□三有の危界、萬卷の浮言を陋しとす。埃塵を超え返かに驕り
 て、勝義の高轡を建て、法王の正教を宣べて、濁世の諠煩を洗う。

其の三。彼の利益の云に周くして、後代に就きて長く往き、玄構落
 ちては疇にか依り、法日墜ちては安くにか仰がん。絶嶠ひづりを踰ひこぎて以
 て塔を閱、崇巖に因りて像を鑲み、銘頌を山阿に留めて、芳風を□
 響に庶う。其の三。

九 大周相州安陽靈泉寺故寺主大德智法師像塔之銘并序

【釋文】

大周相州安陽靈泉寺故寺主大德智法師像塔之銘并序

法師諱朗。字□智。俗姓王氏。其先周□□□□後。鄴城生也。

□祖惟稱。芬馥梅檀。師生稟神。□早□塵濁。年七歲。投大慈寺

主大德超法師。□□□誦維經□□。至年十二。屬大唐太原文武

聖皇帝。廣闢度門。便蒙剃□。建□□□戒□。依本寺曇源律

師習毗尼□。業□之後。又□慈潤寺主大德智神論師。學□曇□

□□般若金剛般若。并中觀等。三經二論。□□流□敷揚。

或研精默識。加以統之眼一分□於□易□玄文。方同三絕。老莊

素問。博泛□流。□五□金剛般若及尊勝咒等。各二遍。文

／梵音□首□縑□。春秋六十有八。夏陰□□悲傷。門□大雲寺僧玄

年六月五日。遷識。嗚呼大□□□悲傷。門□大雲寺僧玄

玄果。零泉寺僧玄□玄暉。／攀慕慈誨。思報莫由。遂於州西南

二十餘里本寺／懸壁山之陽。起塔供養。以三年七月廿五日。□

□永畢。塔內便造一弥勒像二鋪圖形。奉侍一□□□以跡宣。

敬託彫刻。乃爲銘曰。／

子晉之後。命氏爲□。載流遠派。爰宅□漳。父□德。令門令望。

降生才子。玉質金箱。幽□水白。天花□黃。稻衣／夙被。禮□早芳。

經泉□玉。戒海浮香。迦□小教羅□／莊嚴。佛頂捨筏金剛。于講

于誦。無怠無荒。精誠□□。／□心□強。中宗懸解。外法通方。歌
 頌持□。唱導□長。以□□□用此弘揚。□胎有□。□樂無□。
 □符屏□。□□□□。輪□□。月啓□果。粵有子尙□師□披山
 建□石開堂。敬□聖勒曆于傍身命有於供侍無心。□□□畢。
 銘頌攸彰。裨同遵於大道。庶悲□□□。／

大周相州安陽靈泉寺故寺主大德智法師像塔之銘并序。

法師、諱は朗、字□智、俗姓は王氏。其の先は周□□□□の後、

鄴城の生なり。□祖惟れ稱えられ、梅檀より芬馥たり。師、生れてよ

り神を稟け、□早□塵濁、年七歳にして大慈寺主大德超法師に投じ、

□□誦維經□□、年十二に至りて、大唐太原文武聖皇帝、廣く度

門を闢くに屬り、便ち剃□を蒙り、建□□□戒□、本寺の曇源

律師に依りて毗尼□を習い、業□之後、又、□慈潤寺主大德智神論

師、□□曇□□般若・金剛般若、並びに中觀等の三經二論を學

び、□□□流□敷揚、或いは默識を研精す。加以統之眼一分□

於□易□玄文、方に三絶に同じく、老・莊・素問、□流に博泛たり。

□五□金剛般若及び尊勝咒等、各々二遍、文梵音□首□縑

□。春秋六十有八、夏は□□□を踰ゆ。長安二年六月五日に訖び、

遷識。嗚呼、大□□□悲傷。門□大雲寺の僧玄□玄果、零

泉寺の僧玄□玄暉、攀慕慈誨、報いんと思ふも由るなし。遂

に州の西南二十餘里の本寺□懸壁山の陽において、塔を起て供養

す。□三年七月二十五日を以て、□□永えに畢る。塔内に便ち一の彌勒像、二鋪の圖形を造り、奉侍一□□□□以跡宣、敬しんで彫刻に託す。乃ち銘を爲りて曰く、

子晉之後、命氏爲□、載流遠派、爰宅□漳、父□□德、令門令望、降生才子、玉質金箱、幽□□水白、天花□黃、稻衣夙被、禮□早芳、經泉□玉、戒海浮香、迦□小教羅□莊嚴□佛頂捨筏金剛、于講于誦、無怠無荒、精誠□□、□心□強□、中宗懸解、外法通方、歌唄持□、唱導□長、以□□□□用此弘揚、□胎有□、□樂無□、□符屏□、□□□□、輪□□、月啓□果、粵有子尚□師□披山建□石開堂、敬□□聖勒曆于傍身命有於供侍無心、□□□畢、銘頌攸彰、裨同遵於大道、庶悲□□□□、

十 大唐相州安陽縣大雲寺故大德靈慧法師影塔之銘并序

【釋文】

大唐相州安陽縣大雲寺故大德靈慧法師影塔之銘并序／
法師諱嘉運。字靈慧。俗姓劉氏。其先帝王。漢高祖之苗裔。／彭城人也。遠祖因□。遂此居興。子孫派流。於茲不絕。遂爲／魏郡人焉。法師宿植勝□。生而奇狀。早懷慕道。□俗歸／眞。年十歲。遂投慈潤寺方大禪師。出家習業。至年十六。逢／廣啓度門。便蒙剃染。配本縣大通寺。恆以頭陀爲務。六時／禮懺。一食資身。知自行之不弘。乃利他之情廣。更策心訪道。／朝夕孜孜。遂投河南府佛授記寺

翻經大德感法師。□永左／右。學解深密法花仁王轉女身梵網等經。成唯識俱舍等論。／三性一乘之妙旨。半滿達磨之深宗。莫不究盡相□。窮其秘／奧。從茲溫古。道業□新。遂得譽播三川。聲聞八水。

奉／／敕。便留住佛授記寺。輔充翻經感法師侍者。後蒙本州大雲／寺牒。充律師教授。至景雲年中。屬 國家大弘佛事。廣□僧／方。以聖善初成。□□碩德。以法師／道齊林遠。葉紹□安。遂蒙徵召赴／都。充其大德。歸□者若霧。□□者／如雲。三二年間。傳燈□替。後爲情／深色□。請□□鄉住大雲寺。雖解／行周瞻。常懷□足之心。更□分州／宗□法師咨□異見。曲捉□偏授／□途。經論章門。莫不□曉□□。輕／身重法。不憚劬勞。其所稟□。無非／龍持饒益。闡法□□。何圖淨行已回。／捨茲穢利。嗚呼哀□。□□云亡。孰／不凄感。春秋卅有九。夏臘二十有／七。以開元四年六月廿六日。於汾／州平遙縣福聚寺。端拱厭生。奄然／遷識。有姪男慈潤寺僧玄晞。斯乃／不憚艱辛。遂涉山途。由哀展孝。闍毗事畢。取骨歸鄉。門徒與／姪同寺僧圓滿等。師資義重。舉慕弥殷。思出世之□□。相／入道之緣厚。傍求良匠。遠訪丹青。遂於州西南五十里靈／泉寺西南懸壁山南西之陽。敬想靈儀。雕□□□□□。開／元五年歲次丁巳三月辛丑朔廿三日□□。□□／事莊嚴。然理因教發。事假頌陳。利之金□□□□／□日。

粵有良匠。寔亦難倫。幼而捨□。□□□□。可／寶□廣。堪珎尋師。委□□□。□身□□。□□□□。□物處謂遷神。其□。□□□□。

* 京都大學人文科學研究所藏石刻第9輯61函・22は、「如雲三二年閏」より「何圖淨行已回」までと、「不憚艱辛」以降の行の一六字目以下等を缺く。『寶山靈泉寺』を主に参照した。

大唐相州安陽縣大雲寺故大德靈慧法師影塔の銘并びに序

法師、諱は嘉運、字は靈慧、俗姓は劉氏。其の先は帝王、漢の高祖の苗裔、彭城の人なり。遠祖因□、遂に此に居興す。子孫派流して、茲において絶えず、遂に魏郡の人となる。法師、勝□を宿植し、生れながらにして奇狀あり、早に道を懷慕し、俗を□、眞に歸す。年十歳にして、遂に慈潤寺の方大禪師に投じ、出家して業を習う。年十六に至り、廣く度門を啓くに逢い、便ち剃染を蒙り、本縣の大通寺に配せられ、恆に頭陀を以て務めと爲し、六時に禮懺し一食もて身を資くるのみ。自行の弘からざるを知りてより、乃ち利他の情廣く、更に心を策め道を訪い、朝夕に孜孜たり。遂に河南府佛授記寺の翻經大德感法師に投じ□永左右、解深密・法花・仁王・轉女身・梵網等の經、成唯識・俱舍等の論を學び、三性一乘の妙旨、半滿達磨の深宗は、相□を究盡し其の祕奧を窮めざるはなし。茲れに従い古を溫ね、道業□新たなり。遂に響は三川に播き、聲は八水に聞こゆ。

324

然れども理は教に因りて發り、事は頌に假りて陳べらる。利之金□
□□□□日、

粵に良匠あり、寔に亦倫び難し。幼にして捨□、□□□□、可寶□
廣、堪珎尋師、委□□□、身□□□、物處謂遷神、其
一。□□□□才□□□□□□□□則□賢利□善知□□□□□□
道其冥不惑、其。粵有□□□□□□□□雕鐫、上は奇岫に依り、下
は零□を瞰る、□□□□□□□□有夷、希萬代兮、無□□□

十一 唐故方律師像塔之銘

【釋文】

唐故方律師像塔之銘

律師諱寶手。字玄方。俗姓王。□／原人也。後代因官鄴京。遂宅／
鄴下人焉。師道性天稟。□／十三。就當縣大慈寺□大德／和上。誦
法花維摩等經。年廿。／元年。恩敕落髮。配住龍興寺。依止大德／
恪律師。進受戒品。五夏末周。備閑持犯。／於是衆所知識。允屬光
隆。法侶傾□。屈／住當寺。律師十餘年間□□。統理□疲。／身心蓋
靜。春秋三十有七。□□夏凡一十／有五。以開元十年三月一日。蛻
形遷識。嗚／呼大士云逝。孰不悲傷。門徒玄超玄秀玄／英等。攀慕
慈誨。遂於靈泉寺懸壁山陽。起／塔供養。粵以開元十五年三月一日
安厝。／言因事顯。頌以迹宣。乃爲銘曰。／
大士攝生。不貪代榮。堅法幢兮。諷詠榮典。／玄章要闡。□邪教兮。

增善法戒。累鄣腐敗。／摧苦輪兮。生必歸滅。悲哉傷哲。懷哀戀兮。
／建塔山陽。刊石傳芳。□□□兮。／

唐故方律師像塔の銘

律師、諱は寶手、字は玄方、俗姓は王、□原の人なり。後代、鄴京
に官うるに因りて、遂に鄴下に宅まう人たり。師、道性天稟、□十
三にして當縣の大慈寺国大德和上に就いて、法花・維摩等の經を誦
す。年二十、(神龍)元年、恩敕もて落髮し、龍興寺に配住せられ、
大德恪律師に依止して戒品を進受す。五夏未だ周ねからずして、備
さに持犯に閑い、是において衆に知識とせられ、允屬光隆し、法侶
□を傾け、屈して當寺に住ましむ。律師、十餘年間□□、統理して
疲れを□れ、身心蓋し靜かなり。春秋三十有七、□□夏は凡そ二十
有五、開元十年三月一日を以て蛻形し遷識す。嗚呼、大士云に逝く、
孰か悲傷せざらんや。門徒玄超・玄秀・玄英等、慈誨を攀慕し、遂
に靈泉寺懸壁山の陽において塔を起て供養す。粵に開元十五年三月
一日を以て安厝す。言は事に因りて顯われ、頌うるに迹を以て宜ぶ。
乃ち銘を爲りて曰く、
大士生を攝め、代榮を貪はずして法幢を堅つ。榮典を諷詠し、玄
章らかに要闡らかにして邪教を□。善を増し戒に法りて、腐敗を累
鄣し苦輪を摧く。生は必ず滅に歸す、悲しいかな傷哲、哀戀を懷く。
塔を山陽に建て、石に刊み芳を傳え□□□兮。

十二 唐故靈泉寺玄林禪師神道碑并序

【釋文】

唐故靈泉寺玄林禪師神道碑并序

監察御史陸長源撰

法本無生之謂真。心因不染之謂寂。執有求真之謂着。體真歸寂之謂如。非夫善發／惠源。深窮定窟。何足以大明觀行。獨秉禪宗。使定惠兼脩。空有俱遣。道流東夏。聖齊／北山哉。禪師諱玄林。堯城人也。俗姓路氏。黃帝之後。封于路國。因而爲氏。捕虜將軍／端見爲後燕錄。豫州刺史永出晉中興書。邁種于人。嗣有明懷。禪師襟靈爽岸。神氣／備遠。生而克歧。弱不好弄。初遊神書府。精意儒術。覩百氏之奧。窮九流之源。平叔之／疑義兩存。康成之未許多闕。莫不窮蹟至妙。剖析玄理。渙若氷釋。朗然雲開。至如枝／拒蹶張步騎彈射。人則曠劫。藝皆絕倫。後讀阿毗曇藏。遂發心入道。依龍興寺解律／師學業。依年受具。隸居靈泉佛寺。摠衣之歲。惠遠卽風雅書生。落髮之年。道融乃聰／明釋子。以戒爲行本。經是佛緣。雅閑持犯。克傳祕密。學者號爲律虎。時人因爲義龍。／推步渾儀。昭明歷象。天竺跋陀之妙。沙門法願之能。道契生知。理符神授。既習空觀。／遂得真如。身常出塵。心則離念。將在此以超波。不自利以利他。不來相而來。不見相／而見。梵天香以崇發弘願。鳴法鼓以召集有緣。聲振兩河。教被千里。樹林水鳥竹葦／稻麻。願結道緣。爭味禪悅。雖先生槐市。夫子杏壇。攝齋之徒。未足爲喻。於是廣度羣／有。大庇

庶情。應悟攝心。隨分獲益。大雲含潤。草木無幽而不芳。明鏡懸空。妍蚩有形／而各兆。嘗至城邑。因過蒼肆。屠說停刀。酒趙釋爵。擁路作禮。望塵瞻頂。師必款曲以／情。悅可其意。捨資財以攝其利。言力役以勤其生。漸去客塵。令入佛智。有苛吏敗俗。／蠹改唐人。伏以剛強。示之簡易。見方便力。去貢高心。破其重昏。歸以實相。夫學偏者／量偏。道廣者業弘。禪師智括有情。德通無礙。體含虛韻。性有異能。妙窮音律。雅好圖／畫。季長公瑾別有新聲。凱之僧瑤皆德真跡。以是好事君子。翕然同風。擅爲施心。居／無長物。有流離道路。羈旅風霜。鄉隔山川。親無強近。飢者推之以食。寒者解之以衣。／人中之急難。法中之慈濟也。景龍三年 敕追與僧玄散同爲翻譯大德。累表／懇請。詔許還山。禪師自居此寺凡六十年。或宴坐林中。累日忘返。或經行巖／下。踰月不還。跡異人間。行標物表。每遊峯選勝。建塔崇功。驚若飛來。鷹如踊出。官窻／杖標之所。得自神人。破塢移燈之處。傳諸耆老。今山上數十處有窻堵波者。卽其事／也。自金人入夢。白馬員來。譯音議於天竺。布文字於震旦。是爲教本。寔曰道因。禪師／遍寫藏經。以導學者。德實無量。行非有涯。不惟愍持辯才禪定智惠而已。故騰聲洛／下。獨步鄴中。齊達觀之大名。繼稠融之遐躅。噫。日月大地。咸歸有盡之源。河海高山。／不出無常之境。天寶五載十二月十日。因閱僧務。詣主德里。迴首西方。端座如定。不／疾而化。春秋九十餘。僧臘七十一。日黑震驚。車徒奔集。雷慟雨泣。隘谷填山。粵以其／月十七日。遷靈坐于本寺。

禪師真身。忽然流汗。是知因生有滅。乃現真空。示聖出凡。獨探靈相。以八載二月十五日。卽身塔於寺之西北隅。以安神也。其夜霜霰霑凝。山／川草木。皓然如素。東帶雲門。西連峽谷。一佛二佛。前身後身。接林嶺之風烟。成鄴衛／之松柏。禪師洞合神契。妙通法源。義則解空。智能藏往。先是寺中新植衆菓。弱未成／林。悉令沙彌扶之以杖。其夜大雪。折樹摧枝。唯時小枝不動如故。師之冥感多此類也。門人等味道通經。連州跨境。歸宗雖倍。入法益稀。三千門徒。皆傳經於闕里。四百／弟子空問道於襄陽。弟子大通。親奉音塵。常陪庭院。承宮之歲。初執勞以求師。智稱／之年。載弃俗而從道。調九候以除五疾。明六度以伏四魔。感自舊恩。錄憑故事。龕塔／山古。霜露歲深。虎溪爲陵。高蹤不亡於別傳。龍山若礪。盛德長存乎此詞。其銘曰。／

執有非有。親相非相。日離諸妄。得法捨法。悟空非空。是出羣蒙。日景常朗。雲藏其耀。／無雲自照。佛性常在。欲生其塵。無欲爲真。無相捨有。出空離法。大師弘業。親日除雲。／無欲歸佛。大師祕密。茫茫羣有。溺于中流。濟之以舟。冉冉八苦。沒于五濁。導之以覺。／因心發惠。惠契于定。道澄其性。憑緣有生。生歸於無。理不存軀。恆沙一劫。藏舟閱水。／真身去矣。連岡萬古。雲門靈泉。飛塔歸然。

唐故靈泉寺玄林禪師神道碑并びに序 監察御史陸長源撰す。

法本は無生なるを之れ眞と謂い、心因染まらざるを之れ寂と謂う。有に執われて眞を求めるを之れ着と謂い、眞を體して寂に歸するを之れ如と謂う。夫の善く惠源に發し、深く定窟を窮むるに非んば、何ぞ以て大いに觀行を明らかにして、獨り禪宗を乗り、定惠をして兼ね脩め、空有をして俱に遣らしめ、道、東夏に流び、聖、北山に齊しきに足らんや。禪師、諱は玄林、堯城の人なり。俗姓は路氏。黃帝の後なり。路國に封ぜられ、因りて氏と爲す。捕虜將軍端見は後燕錄を爲る。豫州刺史永は晉中興書に出でしひとにして、邁めて人に種き、嗣に明懷有り。禪師、襟靈爽岸、神氣儻遠、生まれながらにして克岐、弱きときは弄ぶを好まず。初め、神を書府に遊ばせ、意を儒術に精らし、百氏の奥を覩、九流の源を窮む。平叔の疑義は兩存し、康成の未詳は多く闕くも、蹟を至妙に窮め、玄理を剖析せざるはなし。渙若として氷釋し、朗然として雲開す。枝拒・厥張・步騎・彈射の如きに至りては、人としては則ち曠劫、藝は、皆、倫に絶ゆ。後、阿毗曇藏を讀んで、遂に發心入道し、龍興寺の解律師に依りて業を學ぶ。年に依り受具して、靈泉佛寺に隸居す。攝衣の歲、惠遠は即ち風雅の書生、落髮の年、道融は乃ち聰明の釋子なり。戒を以て行の本と爲し、經は是れ佛緣とす。雅り持犯に閑い、克く祕密を傳う。學者、號して律虎と爲し、時人、因りて義龍と爲す。渾儀を推歩し、歷象を昭明し、天竺跋陀の妙、沙門法願の能は、道、生知に契い、理、神授に符う。既にして空觀を習い、遂に眞如

を得たり。身は常に塵より出でて、心は則ち念を離れ、將に此に在りて以て波を超えんとし、自利以て他を利せず、不來の相にして來り、不見の相にして見、天香を焚きて以て崇く弘願を發し、法鼓を鳴らして以て有縁を召集す。聲は兩河に振るゐ、教は千里に被び、樹林・水鳥・竹葦・稻麻、道縁を結ばんことを願ひ、争いて禪悅を味る。先生の槐市、夫子の杏壇と雖も、攝齋の徒は、未だ喩と爲すに足らず。是において、廣く羣有を度し、大いに庶情を庇る。悟りに應じて心を攝め、分に隨いて益を獲、大雲、潤いを含めば、草木、幽みて芳らざるはなく、明鏡、空に懸かれば、妍蚩、形われて各々兆すあり。嘗て城邑に至り、因りて蒼肆を過ぎるに、屠は刀を停むを説び、酒は爵を釋くに趨び、路を擁いで禮を作し、塵を望んで瞻頑す。師は必ず款曲するに情を以てして、悦んで其の意を可し、資財を捨て以て其の利を攝め、力役を言ひて以て其の生に勤め、漸く客塵を去りて、佛智に入れしむ。苛吏の俗を敗り、蠹改して人を虐げることあれば、伏するに剛強を以てして之に簡易を示し、方便力を見わして貢高の心を去り、其の重昏を破り、歸するに實相を以てす。夫れ學の偏なる者は量偏く、道の廣き者は業弘し。禪師、智は有情を括り、德、無礙に通じ、體は虛韻を含み、性は異能有りて、妙く音律を窮め、雅に圖畫を好む。季長公瑾、別に新聲有り、凱之僧瑤、皆德いに眞跡あり。是を以て事を好むの君子、翕然として風に向い、擅に施心を爲し、居に長物なし。道路に流離し、風霜に羈旅

する有れば、郷は山川を隔て、親に強近無し。飢えし者には之を推して以て食らわせ、寒えし者には之を解きて以て衣せしむ。人中の急難、法中の慈濟なり。景龍三年、敕して追て僧玄散と共に翻譯大德と爲せしむ。累表して懇請す。詔ありて山に還るを許さる。禪師、此の寺に居りてより、凡そ六十年、或いは林中に宴坐し、累日返るを忘れ、或いは巖下に經行し、月を踰えても還らず。跡は人間に異なり、行は物表に標わる。毎に峯に遊びて勝れしところを選び、塔を建てて功を崇くす。鷲の飛び來るが若く、鷹の踊り出づるが如し。官箴杖標の所は、神人より得、塙を破り燈を移すの處は、諸を耆老に傳う。今、山上、十を數うるの處に窰塔波有るは、即ち其の事なり。金人夢に入り、白馬員に來りてより、音議を天竺に譯し、文字を震旦に布く。是れを教の本と爲し、寔れを道の因と曰う。禪師、藏經を遍寫し、以て學者を導き、德は實に量るなく、行は涯り有るに非ず。惟に惣持・辯才・禪定・智恵ならざるのみ。故に聲を洛下に騰げ、鄴中に獨歩す。達・叡の大名に齊しくし、稠・融の遐躅を繼ぐ。噫、日月大地、咸く有盡の源に歸し、河海高山、無常の境より出でざるなり。天寶五載十二月十日、僧務を閑するに因りて主德里に詣り、首を西方に迴らして、端座すること定の如し。疾まずして化す。春秋九十餘、僧臘七十一。日黒く震驚し、車徒奔集し、雷慟き雨泣き、谷を隘ぎ山を填む。粵に其の月十七日を以て靈坐を本寺に遷す。禪師の眞身、忽然として流汗す。是に知る、生に因りて

滅有り、乃ち眞の空を現わし、聖の凡より出づるを示すは、ただ靈相に標わるのみなるを。八載二月十五日を以て、身塔を寺の西北隅に即き、以て神を安んず。其の夜、霜霰露凝し、山川草木、皓然として素きが如し。東は雲門に帶なり、西は硤谷に連なり、一佛二佛、前身後身、林嶺の風烟に接いて、鄴衛の松柏を成す。禪師、神契に洞合し、法源に妙通す。義は則ち空を解り、智は能く往を藏す。是より先、寺中に新たに衆菓を植ゆ。弱くして未だ林を成さず。悉く沙彌をして之を扶けるに杖を以てせしむ。其の夜大雪ありて樹を折り枝を摧くも、唯、時に小枝の動かざること故の如きのみ。師の冥感、多くは此の類なり。門人等、道を味り經に通じ、州に連なり境に跨ぐ。宗に歸すものは倍すと雖も、法に入るものは益々稀し。三千の門徒は、皆、經を闕里に傳え、四百の弟子は、空として道を襄陽に問う。弟子大通、親しく音塵を奉じ、常に庭院に陪す。承宮の歳、初めて勞を執りて以て師を求め、智稱の年、載に俗を棄てて道に従う。九候を調べて以て五疾を除き、六度を明らかにして以て四魔を伏す。感ずるに舊恩よりし、録するに故事に憑れり。龕塔、山古く、霜露、歳深し。虎溪、陵と爲るとも、高蹤、別傳に亡びず、龍山若し礪れるも、盛徳長く此の詞に存せん。其の銘に曰く、

有に執して有を非とし、相と非相とを覩、日々諸妄より離る。法を得て法を捨て、空と非空とを悟り、是に羣蒙より出づ。日景常に朗らかにして、雲其の耀きを藏すも、雲なければ自のすから照すがご

とく、佛性は常に在り。欲は其の塵を生じ、無欲を眞と爲す。無相にして有を捨て、空に出でて法を離るるは、大師の弘業なり。日を覩て雲を除き、無欲にして佛に歸すは大師の祕密なり。茫茫たるかな羣有、中流に溺れ、之を濟うに舟を以てす。冉冉たるかな八苦、五濁に没み、之を導くに覺りを以てす。心に因りて恵りを發し、恵りは定に契い、道は其の性を澄らかにす。縁に憑って生有り、生は無に歸し、理は軀に存せず。恆沙一劫、舟を藏し水を闕め、眞身去れり。連崗萬古にして、雲門・靈泉、飛塔歸然たり。

十三 唐 靈裕法師灰身塔大法師行記 弟子海雲撰

【釋文】

大唐貞觀六年歲次壬辰八月壬午朔廿日辛丑。建大法師行記。弟子海雲集。

夫 聖生西域。影示現於東川。教被當。流波蓋於萬代。故如來滅後千年之中。廿有四聖。法師傳法也。千年之後。次有八夫。法師亦傳法也。暨大魏太和廿二年。天竺優迦城有大法師。名勒那摩提。寶意。兼乘。備照五明。求道精勤。聖賢未簡。而悲矜苦海。志存傳化。遂從彼中天。持十地論。振斯東夏。授此土沙。光禪師。其。教授。如瓶寫水。不失一滴。其光律師。俗姓楊。盧奴。弟子名振齊魏十有餘人。謂。師。此等十德皆有別傳。若大／乘宗旨。深會取捨之方。

矣。法師道諱靈。八。秋中涉學。學且散矣。薄言從宅。巡衢野望。繁霜滿。怖。猛。倚樹嘆息。命也。忠情既發。留者／誰乎。不計危亡。專投隱覺。於臘月。此日。而受出家。求仙之念。從是。而兼餌誦。念。吾當學問於閭／浮提中作最大法師。若不爾。奉大法師。／聽十地地持。其法師也。道諱道。之威。巍巍自住。薄年在從。之威。巍巍自住。薄有四王之德。師於夏日。輒患。還向定州。而受具戒。受已遡翩復返上原。年廿。亦訖。年廿六。從隱律師。／學於四分。其律師也。業想清廿九。向彼白鹿。李／潛下寺。首尾一周。時造十地疏。冬。還鄴。更訪

首。年卅一。兩卷。集勝鬘疏一卷。集菩薩戒本一卷。集
 聽雜阿毘曇／四有餘遍。兩遍既周。私
 在鄴京。講十地論。一卷。合十三卷矣。／年卅三。聊講華嚴。
 時有。康覆牀而已。於此康下隨力撰制。謂集
 一卷。／集无量壽經疏一卷。集。集溫室疏一卷。集遺／教論疏一卷。
 集衆經宗。信三寶論一卷。集食穀／雞卵成殺有罪論一卷。
 卅七。赴請范／陽。隨宜闡說。三智。齊祚麻頹。聖駕在運。三寶頓
 壞。殘僧驚竄。逃趣無於時。有俗弟子將太清。作十怨頌十首。作十／志頌十首。

作齊亡消日頌。集滅法記一卷。集綱一卷。集莊紀一卷。集五兆書一卷。年六十。赴請定州。遂歷燕趙。記一卷。集申請書一卷。年六十。返迹洛州。於俗弟子。集四分戒本疏一卷。集金剛般若論疏一卷。集破寺。雅頌一卷。年七十四。爲文皇帝。命入咸陽。策杖。後還相州。集上首御衆法一卷。集佛法東行譯經法師記一卷。集上首御衆法一卷。集陵山寺。哀哉。慧日此時歿矣。而不倦。勤講勤說。死而方止。講經講論。護法爲。唯上補衣鹿食。事盡一生。婦女及尼。交遊迹絕。骨愛道。本非學得。志在事省。不求繁務。雖居邑。講聲氣雄亮。初緩而終急。華嚴經講九。百。講七遍。涅槃經講三遍。

母經講一。其若堅義。夜別一人僧次差長極。唯使大僧。門求。受苦薩戒後。弘化大隋。高餘於。上而短下。細而不。閭浮一所。聖賢不憚。東土傳化。起於漢明。摩騰迦葉。來此於。中天之地。城名優迦法。風內鼓。遊茲洛邑。專弘大乘。精成難。龍象遞出。法輪相繼。時十八。出家求學。造此結門。二十有一。南遊鄴京。大。其間誤結。內外俱駕。八。有。講說住持。如龍處雲。雨法雨此時。雲滅來世。蒼生傳名。十方佛名。南无東方善德如來。南无東南方无憂德如來。南无南方梅檀德如來。諸佛。南无西南方寶施如來。諸佛。南无西方无量明如來。諸佛。南无西北方華德如來。諸佛。南无北方相德如來。諸佛。南无東北方三乘行如來。諸佛。南无上方廣衆德如來。諸佛。南无下方明德如來。諸佛。十二詔經名。羅詔。此稱本經。二名祇夜詔。此稱頌上偈。三名和伽。

□□□□□。□伽陀記。／□□□□上偈。五名憂陀那記。此稱无問自說經。六名尼陀那□。□因緣經。七□□陀那／□。□□□喻經。八名伊帝曰多伽記。此稱本事經。九名闍陀伽記。此稱本生經。十□□／□□□□有經。十一名阿浮陀達磨記。此稱方廣經。十二名憂波提舍記。此稱論□。／

七地諸菩薩僧。一種性地一切諸菩薩。二解行地一切諸菩薩。三淨心地一□□□□。□／跡地一切諸菩薩。五決定地一切諸菩薩。六決定行地一切諸菩薩。七畢竟地□□□□□。／

攝大乘論中諸菩薩緣佛法身七念偈。隨屬如來心。圓德常无失。无功用能□。／衆生大法樂。遍行无有礙。平等利多人。一切一切佛。智人緣此念。

又諸佛法身自／利依止五喜偈。諸佛如來受五喜。皆由證得自界故。二乘无喜由不證。求喜要須證佛界。／由能无量作事立。由法美味欲德成。得喜最勝无有失。諸佛恆見四无盡。／

十四 方法師鑲石班經記（小南海石窟）

【釋文】

大齊天保元年。靈／山寺僧方法師。故／雲陽公子林等。率／諸邑人。刊此巖窟／髣像眞容。至六年／中。國師大德稠禪／師。重鑿修成。相好／斯備。方欲刊記金／言。光流末季。但運／感將移。暨乾明元／年歲次庚辰。於雲／門帝寺。奄從遷化。／衆等仰惟。先師依／准

觀法。遂鑲石班／經。傳之不朽。／（以下 華嚴經偈讚、大般涅槃經聖行品一略）

大齊天保元年、靈山寺の僧・方法師、故雲陽公子林等、諸邑人を率いて此の巖窟に髣像の眞容を刊む。六年中に至り、國師大德稠禪師、重鑿修成し、相好斯に備わる。方に刊んで金言を記し、末季に光流せしめんと欲す。但、運感將に移らんとし、乾明元年歲次庚辰に暨び、雲門帝寺において奄として遷化に従う。衆等仰ぎ惟えらく、先師、觀法に依准すと。遂に石に鑲み經を班ちて、之を不朽に傳う。

十五 茲潤寺故大靈琛禪師灰身塔銘文（安陽縣金石錄卷三、八瓊室金石補正卷二九）

禪師俗姓周。道諱靈琛。初／以弱冠出家。卽味大品經／論。後遇禪師信行。更學當／機佛法。其性也慈而剛。其／行也和而潔。但世間福盡。／大闡時來。年七十有五。歲／在元枵三月六日。於茲潤／寺所。結跏端嚴。泯然遷化。／禪師亡日。自足冷先頂臚／後歇。經云有此相者。尅□／生勝處。又康存遺囑。依經／□林血肉施生。求无上道。／□合城皂白。祖教弗違。含／悲傷失。送茲山所。肌膚纔／□。闍維鑲塔。冀海竭山灰。／芳音永嗣。乃爲銘曰。／逖聽玄風。高惟遠量。三學／具捨。一乘獨暢。始震法雷。／淪道藏。示諸滅體。效茲／奇相。器敗身中。臚餘頂上。／結跏不改。神

域亡。奄。慧日。／既虧。群迷失望。非生淨土。／彈指何向。塔頌一
首。／崖高帶淥水。鑄塔寫神儀。／形名留萬古。劫盡乃應虧。／
大唐貞觀三年四月十五日造

函 號	函 號	『寶山靈泉寺』	備 考
61-1	43-1		
-101		圖48	小南海（善應）石窟
	-2	圖60	43-2-1～3
-18	-4		
-16	-3-1		43-3-1は碑額（篆書）あり
-104	-3-2		61-16, 104は隋とし, 43-3は北齊とす
-104	-3-4		安陽卷2は「在魏齊間」とす（補正卷22 同）
-104	-3-3, 5		
-2	44-5	嵐峰山61號	史蹟解説上（卷5）76頁は隋とす
-5, 6	-7	寶山16號（大住聖窟）	
-3	-8-1		
-4	-8-2		
-7	-78		61-7-A～E（C缺）, 43-78-1～2
-8	-3		
-9, 102	-2	圖188	61-102B, A
-10	-1		
-11	43-79		
12	-77		
-13			
-14	-10		
-15	-9		
-103	-80		隋靈裕法師灰身塔側
	-11	寶山19號龕	
-26	-12	寶山 3號龕	
-29	-13	寶山60號	
-27A, B	-15-1, 2	寶山 4號龕	27A=15-2, 27B=15-1
-28A, B	-5-1, 2	寶山68號	28A=5-1, 28B=5-2
-29A, B	-6, 14	寶山74號龕	61-29A=43-14, 61-29B=43-6【開皇14年10月歿】
			安陽卷3, 補正29, 河朔卷2, 善應山に存したか
-24	-16		43-16は隋とする
-21A～H （部分拓）	-18-1, 2 （全拓）		61-21A G=43-18-1, B C=18-1, D E H=18-2 21AとGは同, Fは缺
-9A, B	-19-1, 2	寶山80號	61-30A=43-19-2, 61-30B=43-19-1【貞觀11年4月歿】
	-21-1, 2	嵐峰山47號	【貞觀13年2月歿】

《寶山靈泉寺石窟石刻目錄 有紀年銘》

番號	時代	年 號	西曆	題 銘	造 立 者 名
1	東魏	武定 4 年 4 月 8 日	546	道憑法師造題記	
2		乾明 1 年	560	方法師鑲石班經記	
3		河清 2 年 3 月 17 日	563	憑法師燒身塔記	
4	北齊			大方廣佛華嚴經菩薩明難品	東安王婁睿 等
5				佛會說發願文及大乘妙偈碑 (碑陽全拓)	
				(碑陰)	
				(碑側)	
				(同)	
6				大留聖窟題記	
7	隋	開皇 9 年	589	大住聖窟龕記及歎三寶偈 法華經壽量品	靈裕
				大住聖窟那羅延神王題名	
				大住聖窟迦毘羅神王題名	
				妙法蓮華經分別功德品	
				五十三佛名 (觀藥王藥上二菩薩經)	
				三十五佛名 (決定毘尼經) 及十方佛名	
				二十五佛名	
				大集經月藏分法滅盡品初	
				涅槃經	
				勝鬘經	
				大集經月藏分及摩訶摩耶經	
				世尊去世傳法聖師題名并畫像	
8				略禮佛懺悔文	
9		開皇 9 年 1 月		故比丘□登枝提塔記	
10		10 年 1 月		道政法師支提塔記	
11		13 年	593	故大融法師枝提塔記	
12		14 年	594	故靜證法師碎身塔記	
13		仁壽 1 年 1 月	601	比丘道寂願生安樂灰身塔記	
14		2 年 4 月	602	比丘諱慈明支提塔記	
15	唐	貞觀 3 年 4 月 25 日	629	慈潤寺故大靈琛禪師灰身塔銘文	
16		6 年 8 月 20 日	632	靈裕法師灰身塔記	
				靈裕法師灰身塔大法師行記	
17		12 年 4 月 8 日	638	故大僧堪法師灰身塔記	
18		14 年 5 月 23 日	640	光天寺故大比丘尼僧順禪師散身塔記	弟子 等

函 號	函 號	『寶山靈泉寺』	備 考
-31	-20	圖202-1, 2	
-32, 106	-22	嵐峰山25號	【貞觀15年は歿年】
-33	-23	寶山65號	【貞觀16年は歿年】
-34	-25		
-35	-24	寶山75號龕	【貞觀16年1月歿】
-79	-69-1, 2	嵐峰山45號 圖206	61-37, 43-26の題記
-37	-26		法師俗姓崔舍利塔記銘 (43-26) 【貞觀17年8月歿】
-36	-27	嵐峰山48號	【貞觀18年5月歿】
-78	-29-1	嵐峰山42號	61-39, 43-29-2の題記, 61-39は下端29字を缺く
-39	-29-2		【貞觀20年は歿年】
-38	-28	寶山79號龕	【貞觀19年歿】
-40 A, B	-30-1, 2	寶山79號塔龕の題記	61-40 B = 43-30-1 (横書), 61-40 A = 43-30-2 寶山79號龕雕刻は缺字多し
-41	-32	寶山83號	
-91	44-11	寶山22號	
-42 A, B	43-34-1, 2	嵐峰山26號 圖199	61-75は「隋 造灰身靈塔頌」, -105は「隋 塔頌」,
-75, 105	44-4	圖ナン	44-4は「經文殘石」と表記するが, 以上を嵐峰山
-107	43-31	嵐峰山26號 圖200	26號は一具とす (91頁) 【貞觀20年3月歿】
-76		寶山77號	61-76は紀年部分なし
	-38	嵐峰山40號	
		嵐峰山44號	
		嵐峰山?	
	-35	嵐峰山38號	
		嵐峰山41號	嵐峰山41號は貞觀28年に誤る
	-36, 37	嵐峰山39號	
			河朔卷2
			同上
		寶山72號	
	43-33	?	貞觀は23年まで
	43-39	?	
9-43		寶山82號	
-44 A, B		寶山76號龕	
-45	-40	寶山58號	

寶山靈泉寺石窟塔銘の研究

番號	時代	年 號	西曆	題 銘	造 立 者 名
				僧順禪師塔銘	
19		15年 4 月23日	641	故慧靜法師靈塔之銘	弟子法演
20		16年10月10日	642	慈潤寺故大智迴論師灰身塔記	弟子智炬
		18年 4 月10日	644	弟子智炬爲師重建支提塔記	
21		18年 4 月12日	644	慈潤寺故大智焱律師灰身塔記	弟子智瓊
22		18年11月15日	644	光天寺故大比丘尼普相法師灰身塔記	弟子普閏・善昂・愛道等
				弟子普閏善昂愛道爲亡師造灰身塔銘 (9-37)	
23		19年 2 月 8 日	645	故清信女大申優婆夷灰身塔記	三女
24		20年 3 月21日	646	聖道寺故大比丘尼靜感禪師灰身塔記	姪女靜端・靜因・門徒等
25		20年 4 月 8 日	646	大雲法師灰身塔銘 報應寺故大海雲法師灰身塔記	
26		20年10月15日	646	故大優婆塞晉州洪洞縣令孫伯悅灰身塔銘	聖道寺智覺尼
27		20年	646	張文達造阿彌陀佛觀世音菩薩大勢至菩薩像記	張文達
28		21年 4 月 8 日	647	慈潤寺故大慧休法師灰身塔記 塔頌 慈潤寺故大論師慧休法師刻石記德文	相州刺史越王貞
29		21年 7 月 8 日	647	靈泉寺故大修行禪師灰身塔記	邑子 等
30		22年 1 月 8 日	648	聖道寺大比丘尼善行法師灰身塔記	弟子
31		22年 2 月 8 日	648	聖道寺故大比丘尼那延法師灰身塔記	弟子 等
32		22年 3 月 8 日	648	故清信女張優婆夷灰身塔記	出家女
33		22年 4 月 8 日	48	聖道寺大比丘尼圓藏寺主灰身塔記	弟子遠行 等
34		22年 4 月 8 日	648	故清信女佛弟子范優婆夷灰身塔記	出家女
35		22年 7 月 8 日	648	聖道寺故大比丘尼智海法師灰身塔記	弟子 等
36		22年 7 月	648	張希冲灰身塔記	
37		22年 8 月	648	杜優婆夷散身塔記	
38		23年	649	靈□□□□□□□	
39		24年 2 月15日	650	張優婆夷姪妹灰身塔記	
40		永徽 1 年 2 月 8 日	650	故粟優婆夷灰身塔銘	
41		1 年 2 月 8 日	650	故居士子蕭儉灰身塔記	
42		1 年 6 月 8 日	650	故優婆塞張客子灰身塔記	
43		1 年12月 8 日	650	慈潤寺故大法珎法師灰身塔記	

函 號	函 號	『寶山靈泉寺』	備 考
-46	-41	寶山85號	
	-42	嵐峰山37號	
	-43	寶山17號龕	
-47	-44	寶山66號	
	-45	嵐峰山36號	
		嵐峰山35號	
		嵐峰山56號	「嵐峰山56號鈔文」(94頁)とあるのは銘文の誤り
		嵐峰山61號旁銘文	嵐峰山61號は大留聖窟の編號
		嵐峰山34號	
		嵐峰山54號	
		寶山32號	
			安陽卷3
-48	-46	寶山93號	
-49		嵐峰山31號	
-50		嵐峰山81號	
-51 A	-48	嵐峰山62號	
-51 B	-49	嵐峰山63號	
-52	-47	嵐峰山66號	
-53	-50	嵐峰山65號	
-54 -55, 108	-51-1 -51-2	寶山67號	上記の題銘
-56	-52	嵐峰山67號	
-57	-53	嵐峰山70號	
		嵐峰山71號	
-58	-54	嵐峰山52號	
-59	-55	嵐峰山82號	
		寶山119號	
	-56	嵐峰山69號	
-60			
		嵐峰山68號	
-61	-57		61-61は「相州釜陽縣尉」とす
			河朔卷2

番號	時代	年 號	西曆	題 銘	造 立 者 名
44		2年4月8日	651	慈潤寺故道雲法師灰身塔記	
45		2年10月8日	651	光天寺故大比丘尼大智禪師灰身塔記	弟子妙因・眷屬
46		3年3月8日	652	造阿彌陀觀世音大勢至菩薩像龕記	諸檀越・有緣
47		5年1月2日	654	光嚴寺故大上坐慧登法師灰身塔記	
48		5年5月8日	654	光天寺乞食衆故大比丘尼海德禪師灰身塔記	弟子徒衆・眷屬
49		5年7月8日	654	聖道寺故大比丘尼明行法師灰身塔記	
50		6年1月26日	655	故清信佛子玉灰身塔記	「男女等□□爲母」
51		6年2月8日	655	聖道寺故大比丘尼大信法師灰身塔記	弟子 等
52		6年5月8日	655	聖道寺故大比丘尼大善法師灰身塔記	弟子 等
53		6年7月8日	655	聖道寺故大比丘尼□□法師灰身塔記	弟子開性 等
54		7年1月8日	656	□□□□□□□□□□	
55		□年2月□日		慈潤寺故大德禪師灰身塔記	檀越
56		顯慶2年2月27日	657	故清信士馮仁剛灰身塔記	
57		2年7月8日	657	聖道寺故大比丘尼慧澄法師灰身塔記	弟子德藏 等
58		3年1月4日	658	故大張優婆夷灰身塔記	出家女□□□丘尼
59		3年2月8日	658	聖道寺故大比丘尼僧愍法師灰身塔記	弟子法義 等
60		3年2月8日	658	聖道寺故大比丘尼妙信法師灰身塔記	弟子普明 等
61		3年2月8日	658	光天寺故大比丘尼妙德法師灰身塔記	弟子妙意・寶索 等
62		3年4月8日	658	光天寺故大都維那正信法師灰身塔記	弟子圓行 等
63		3年4月8日	658	故清信士呂小士灰身塔記	妻戴（氏）
64		3年12月8日	658	故大都維那慧雲法師灰身塔記	弟子 等（？）
65		4年4月14日	659	光天寺故大比丘尼智守法師灰身塔記	弟子僧慶 等
66		5年2月8日	660	聖道寺故大比丘尼修行法師灰身塔記	弟子修惠・法力…等
67		龍朔1年4月8日	661	聖道寺故大比丘尼□□法師灰身率堵□記	弟子法□ 等
68		3年11月21日	663	聖道寺故大比丘尼道藏灰身塔記	弟子善英 等
69		麟德1年11月9日	664	相州鄴縣萬春鄉綏德里住段王村劉才戡□才□父灰身塔記	侄易□果
70		乾封1年2月3日	666	聖道寺比丘尼善意灰身支提塔記	弟子法閏・智慧・□勝・善靜・法神 等
71		1年2月8日	666	慈潤寺故大員昭律師灰身塔記	弟子會福寺都維那惠朗・慈潤寺僧尸羅
72		2年2月15日	667	聖道寺比丘尼善勝灰身塔記	弟子尙解・洁戎・善威・靜行・善道 等
73		2年2月	667	相州安陽縣尉劉貴寶供養記	
74		2年		慈潤寺大善華法師灰身塔記	

函 號	函 號	『寶山靈泉寺』	備 考
	-58	嵐峰山74號	
	-59		
	-60	嵐峰山72號	
			河朔卷2
			河朔卷2
		嵐峰山19號	嵐峰山19號翻刻は「比丘」とす
-62A, B		寶山106號	【垂拱2年4月歿】61-62A, Bは各行末に缺字あり
-63A, B	-61-1, 2	寶山64號龕	【長安2年6月歿】
			河朔卷2
			河朔卷2
-22		寶山109號	61-22は右片左端91字, 左片下端を缺く 【開元4年6月歿】安陽卷3
			河朔卷2
-64A		寶山110號	寶山110號の翻刻は開元13年とす (87頁, 河朔卷2同)
-64B			【開元11年12月歿】
-69, 109B -65, 109A	-62-1 -62-2	寶山108號	寶山108號の翻刻前半は61-69, 43-62-1と同じく 下端2字～5字を缺く【開元10年3月歿】
			河朔卷2
-66	-63	寶山97號	【天寶5年3月歿】(寶山97號翻刻は沒年を「三載」とす)
-19A	-72-1		『寶山靈泉寺』附錄一 (76～77頁)【天寶5年12月歿】
-19B	-72-2		43-72-3 同碑側 (北宋 大觀元年-1107)
-64			
-67	-65		『寶山靈泉寺』二- (三) 唐代雙石塔 (10頁)
	44-15		安陽卷4
			安陽卷4, 河朔卷2「今均佚矣」
			安陽卷4, 河朔卷2 同上
-70	43-70		『寶山靈泉寺』圖19
			安陽卷5, 河朔卷2
			安陽卷5, 河朔卷2
			安陽卷5
			河朔卷2
			河朔卷2【至道1年5月歿】
-23	-71		『寶山靈泉寺』付錄一 (75～76頁)
-20	-73		

番號	時代	年 號	西曆	題 銘	造 立 者 名
75		總章1年3月28日	668	聖道寺故大比丘尼法忍灰身塔記	弟子法周 等
76		咸亨4年2月15日	673	灰身塔記	
77		上元3年1月4日	676	聖道寺故比丘尼本行灰身塔記	
78		儀封2年12月	677	故太傅優婆夷塔記	
79		?		李仁遠題銘	
80		垂拱3年2月15日	687	□明寺大法師比丘(尼?)靜行灰身塔	弟子比丘尼靜寂洪(?)
81		天授2年4月8日	691	大唐願力寺故贍法師影塔之銘并序	
82		長安3年7月25日	703	大周相州安陽靈泉寺故寺主大德智法師像塔之銘并序	門□大雲寺僧玄□玄果 靈泉寺僧玄□玄暉
83		3年10月	703	僧玄皎造像	
84		開元4年	716	大德嘉蓮法師影塔銘	
85		5年3月23日	717	大唐相州安陽縣大雲寺故大德靈慧法師影塔之銘	姪男慈潤寺僧玄晞
86		5年11月	717	李山弘常師□等十二人造像銘記	
87		12年 月20日	724	俗姓張法師塔銘(張法師殘塔記)	門人
				(開元僧人殘塔記)	
88		15年3月1月	727	故方律師像塔之銘	
89		?年7月		故優婆□□張客灰身塔記	
90		天寶6年2月15日	747	靈泉寺元藏灰身塔記	
91		8年2月15日	749	故靈泉寺玄林禪師神道碑并序(碑陽)	弟子大通
				(碑陰)	
92		大曆6年4月15日	771	徐淮等題靈泉寺詩	
93		咸通8年5月	867	禹璣題記 十四阿用從者鐵兒題名	
94		9年5月	868	禹璣再題記	
95		10年	869	鄭儒題名記	
96	後周	顯德1年12月	954	相州彰德軍採石記	
97	宋	咸平4年2月	1001	高勳妻造像	妻趙氏女…五人 等
98		4年	1001	李密妻張氏造像記	妻張氏次妻和…合家眷屬
99		4年	1001	光嚴村造像記	
100		□平4年	1001	劉二姐造像	
101		大中祥符3年8月	1010	相州觀音院智幽法師塔記	
102	宋	紹聖1年12月8日	1094	有隋相州天禧鎮寶山靈泉寺傳法高僧靈裕法師傳并序	德殊敘并題額・師慶書
103	金	大定4年12月	1164	寶山靈泉寺地界記	

函 號	函 號	『寶山靈泉寺』	備 考
			河朔卷2
			河朔卷2
-71			
-72	-74		
-73			
-74	-75		
-25	-76		照斌照用法英等修法施食誦經記 (43-76)

函 號	函 號	『寶山靈泉寺』	備 考
61-92	44-12		44-12は後半の5行のみ
-93-	6	寶山13號 (? 88頁)	圖-77 寶山靈泉寺摩崖塔林圖③に銘文題記なし
-94	-7		44-7は前半2行
-100	43-67-1,2		
-80			
-81			
-77		寶山78號	
-82		寶山100號	寶山100號銘文「大慈潤寺主玄起法師灰身塔」
-83			
-84	44-16	寶山73號龕	『寶山靈泉寺』84頁
-88	-17	寶山73號龕	
-85			
-86			
-87			
-95	-68	寶山23號	
-96	44-8		
-97, 98	44-13-2, 3 -1		61-97は普賢菩薩題名 61-98は文殊師利題名 44-13-1は毗盧舍那佛題名 (横書)
-99			
	43-66		
	44-9		
	-10		
	-14		
	-18		

寶山靈泉寺石窟塔銘の研究

番號	時代	年 號	西曆	題 銘	造 立 者 名
104		20年 3 月	1180	靈泉寺山主智公塔記	明光撰・張汝礪書
105	元	至正17年 4 月	1357	王峯庵主宣公塔記	
106	明	洪武30年 3 月	1397	本師印空和尚靈骨之塔記	
107		永樂19年	1421	本師前代都綱兼福會寺住持林公古山和尚靈骨之塔記	嗣法慧通・慧譚・慧達
108		宣德 4 年	1429	本師都綱智公魯庵大和尚靈塔記	孝子孫…孝小師…師姓…師弟…
109		正統 6 年	1441	圓寂本師住持志公和尚塔記	孝小師明廣
110		正德 6 年12月	1511	寶山靈泉寺記	昭斌・照用・法英

《寶山靈泉寺石窟石刻目錄 無紀年銘》

番號	時代	年 號	西曆	題 銘	造 立 者 名
1	(隋)			佛弟子清信女古大娘陸二娘造阿彌陀觀世音大勢至菩薩記	
2				清信女盧敬造阿彌陀佛觀世音大勢至菩薩像記	
3				清信女王敬造彌勒世尊及二菩薩像記	
4		□□14年12月1□日		處常願見佛題記	「比丘明曄記」
5	(唐)	□□12年 4 月23日		灰身塔記	
6		□□ 4 年11月		故大□□灰身塔記	
7				慈潤寺故大明欽律師支提塔記	
8				大慈寺主玄起（超？）法師灰身塔記	
9				灰身塔記	
10				故郝□居士塔記	
11				故人居士曹羅什塔記	
12				灰身塔記	
13				灰身塔記	
14				相法師灰身塔記	
15				清信女古四娘等造阿彌陀佛觀音菩薩大勢菩薩記	
16				造觀世音菩薩像記	
17				毘盧舍那佛文殊師利普賢菩薩龕題名	
18				東寶山明公等題名	
19		□□ 2 年 3 月		聖道寺□□灰身塔記	
20		□□ 4 年		造像記	
21				姪留哥孫子等造像記	
22				造像記殘石	
23				故□□欽律師灰身塔記	

函 號	函 號	『寶山靈泉寺』	備 考
	-19		
	-20		
	43-68	寶山70號	
		寶山71號	
		寶山20號	
		嵐峰山16號	
		嵐峰山39號	有紀年銘No.33に續いて記すも編號なし (92頁) 題銘の表記は史蹟解説上 (93頁) による
		嵐峰山46號	
		嵐峰山67號	
			河朔卷2「在石窟洞門之東」
	-89		
	-90		

一～八十 44函 百種之八十一～百)

寶山靈泉寺石窟塔銘の研究

番號	時代	年 號	西曆	題 銘	造 立 者 名
24				灰身塔記	
25				十一年四月廿三日終記	
26		2月8日		報應故大僧□法師灰身塔記	
27		7月15日		故□□□□□法師灰身塔記	
28				彌陀佛觀音菩薩大勢至菩薩一龕	
29				光天寺故大比丘尼深□灰身塔	
30				清行寺故大苾芻尼智晉灰身塔記	
31				觀世音菩薩像題記	
32		12月8日		□□ 都維那慧雲法師灰身塔記	
33				相州光天寺塔院講經論沙門弘良殘塔記	
34	明			前代住持第陸代祖師印公和尚覺靈塔記	
35				圓寂本師亮公和尚覺靈之塔記	

◆題銘は、主に京都大學人文科學研究所藏石刻第9輯61函、中國金石拓本第43・44函による。

◆配列の順序は主に起塔の年次による。歿年については備考を参照されたい。

◆無紀年銘の造立者名は、題銘の中に記されているので、重ねて記入していない。

◆使用した略號は以下の通りである。

◇61：京都大學人文科學研究所藏 石刻第9輯61函

◇43, 44：京都大學人文科學研究所藏 中國金石拓本第43, 44函（寶山石刻百種：43函 百種之

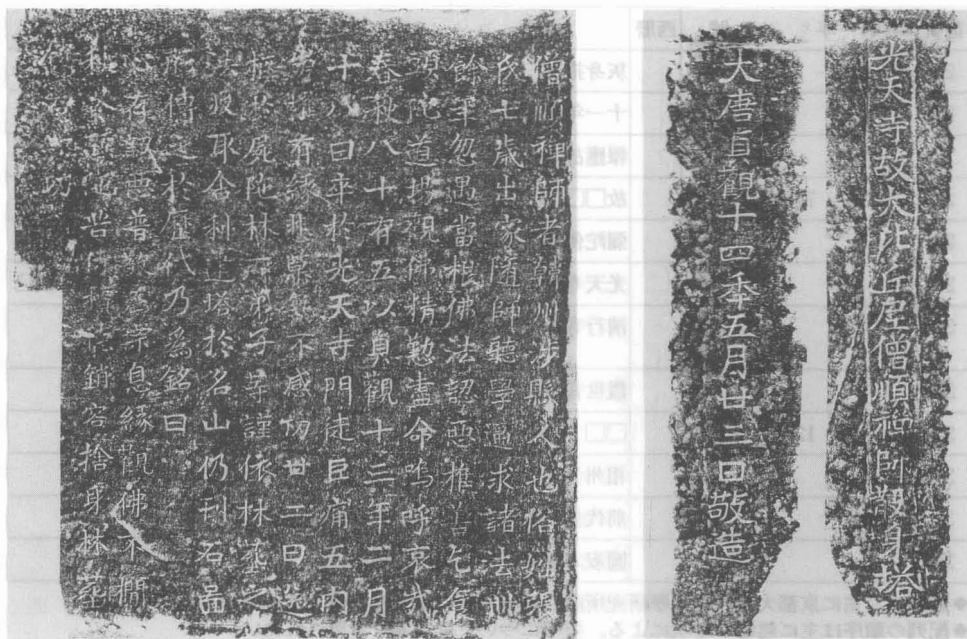
◇『寶山靈泉寺』：河南省古代建築保護研究所編 1991年12月 河南人民出版社發行

◇史蹟解説上：『中國文化史蹟解説上』 1975年4月 法藏館發行

◇安陽：『安陽縣金石錄』清 武億 撰

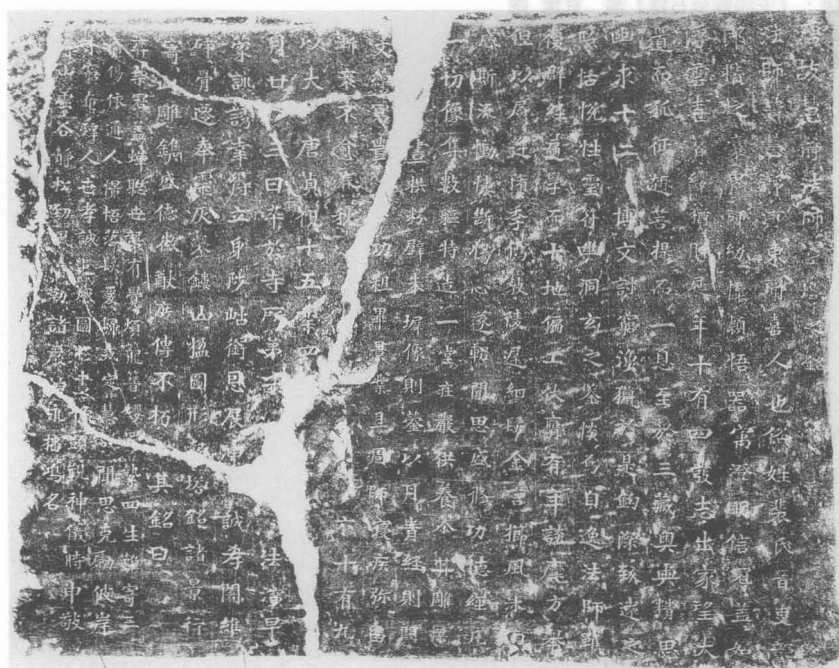
◇補正：『八瓊室金石補正』清 陸增祥 撰

◇河朔：『河朔訪古新錄』民國 顧燮光 撰



拓本1-2 僧順塔銘

拓本1-1 僧順塔銘



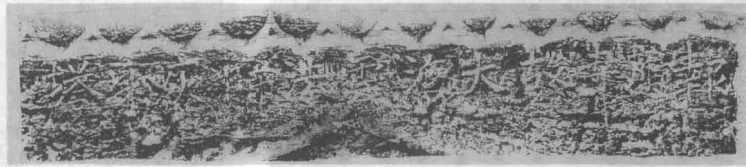
拓本2 慧靜塔銘



拓本3-2



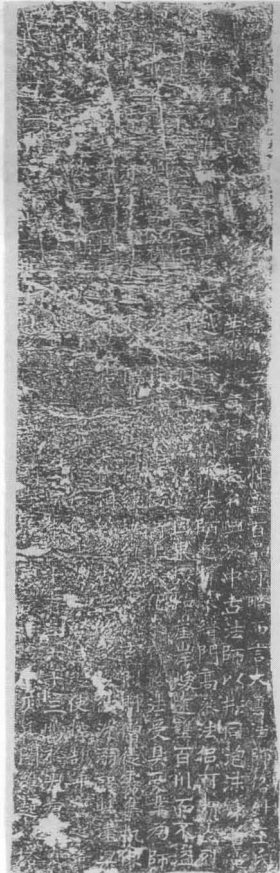
拓本3-1 普相題記



拓本4-1 海運題記



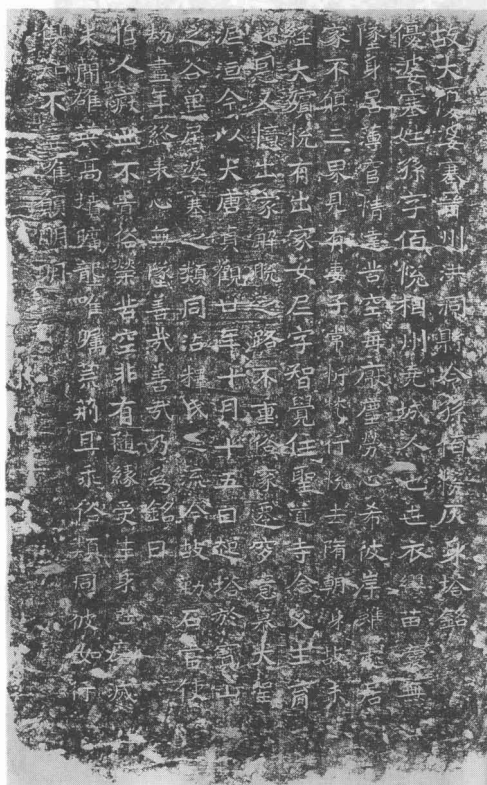
拓本3-3 普相塔銘



拓本4-3 海運塔銘



拓本4-2



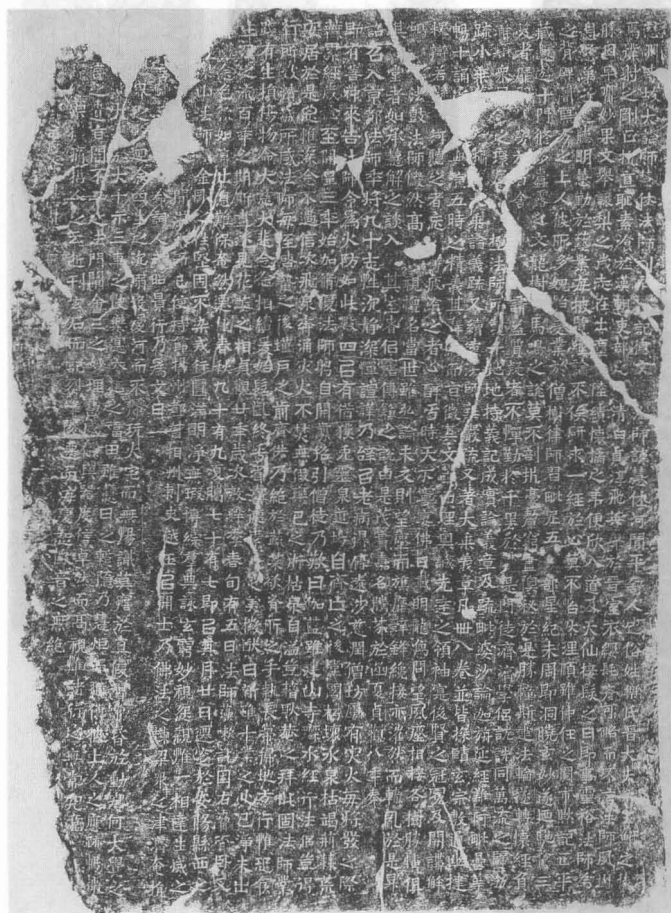
拓本 6 孫伯悅塔銘



拓本5-1 靜感題記
拓本5-2 靜感塔銘



拓本7-1 慧休題記



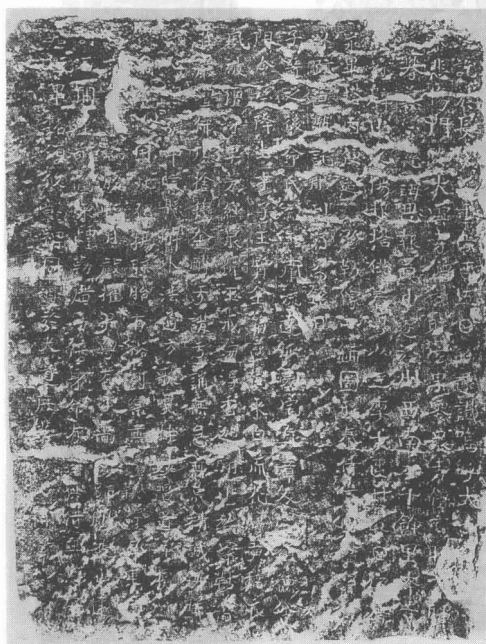
拓本7-3 慧休刻石記德文



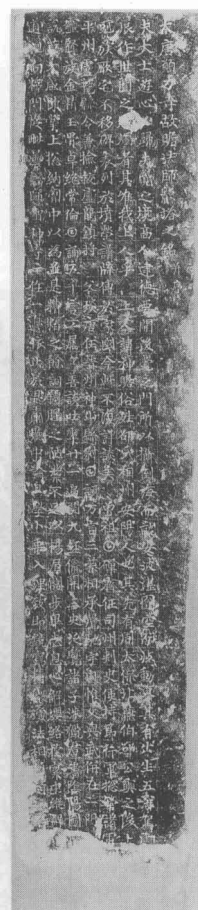
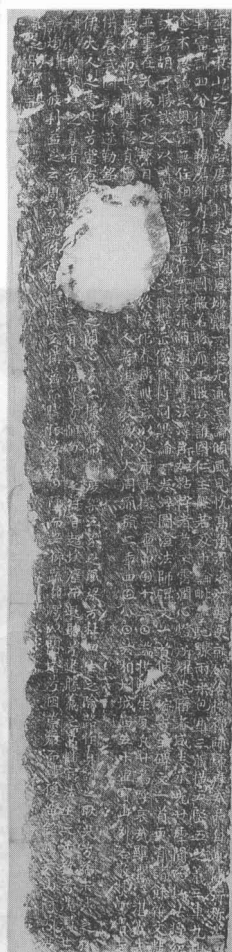
拓本7-2 慧休塔頌



拓本9-1 智法師塔銘



拓本9-2



拓本8 神瞻塔銘



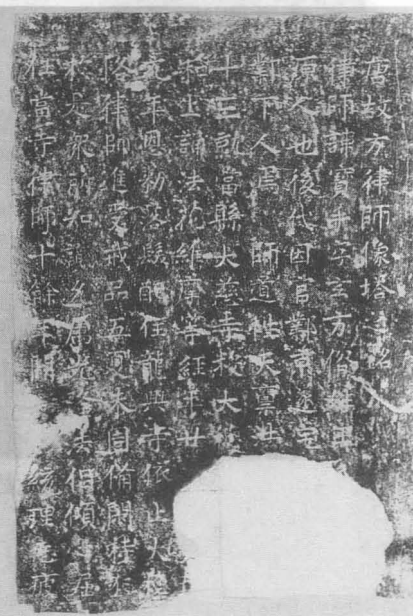
拓本10-2



拓本10-1 靈慧塔銘



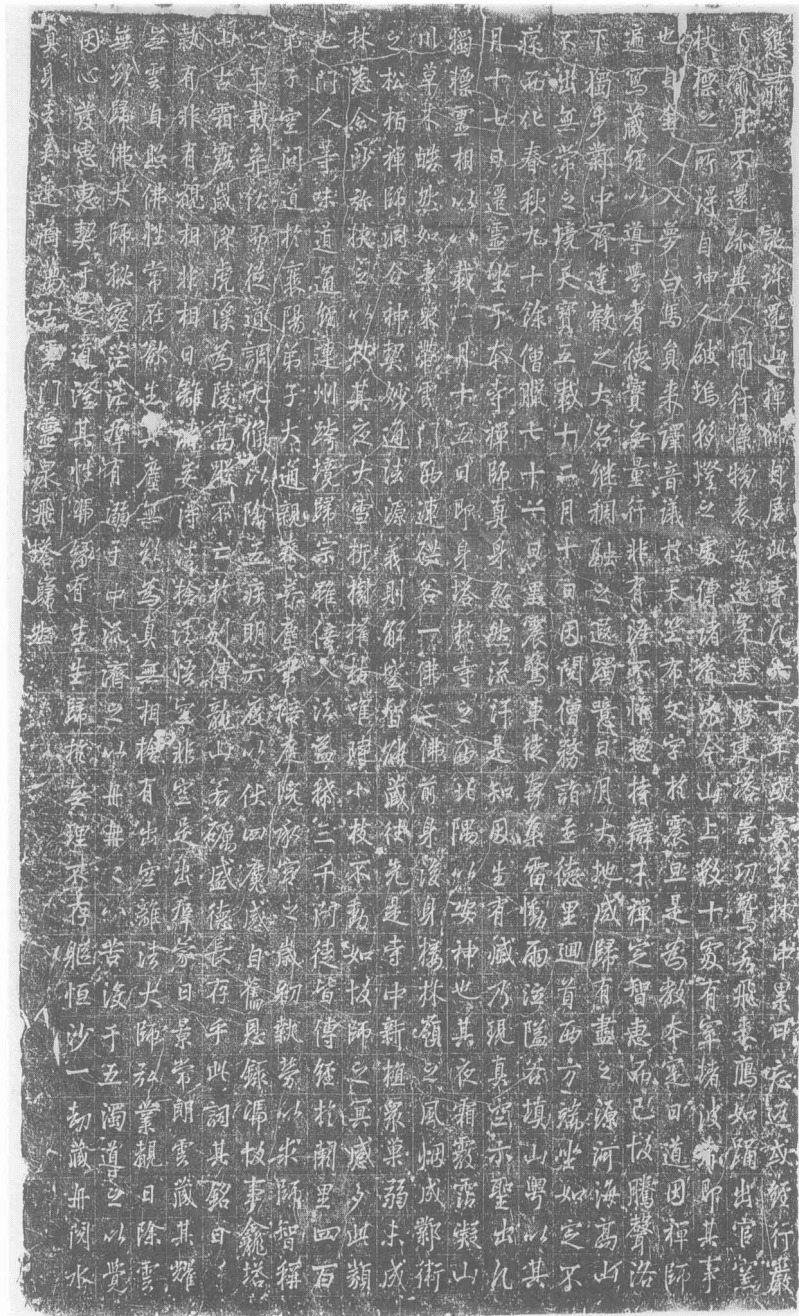
拓本11-2



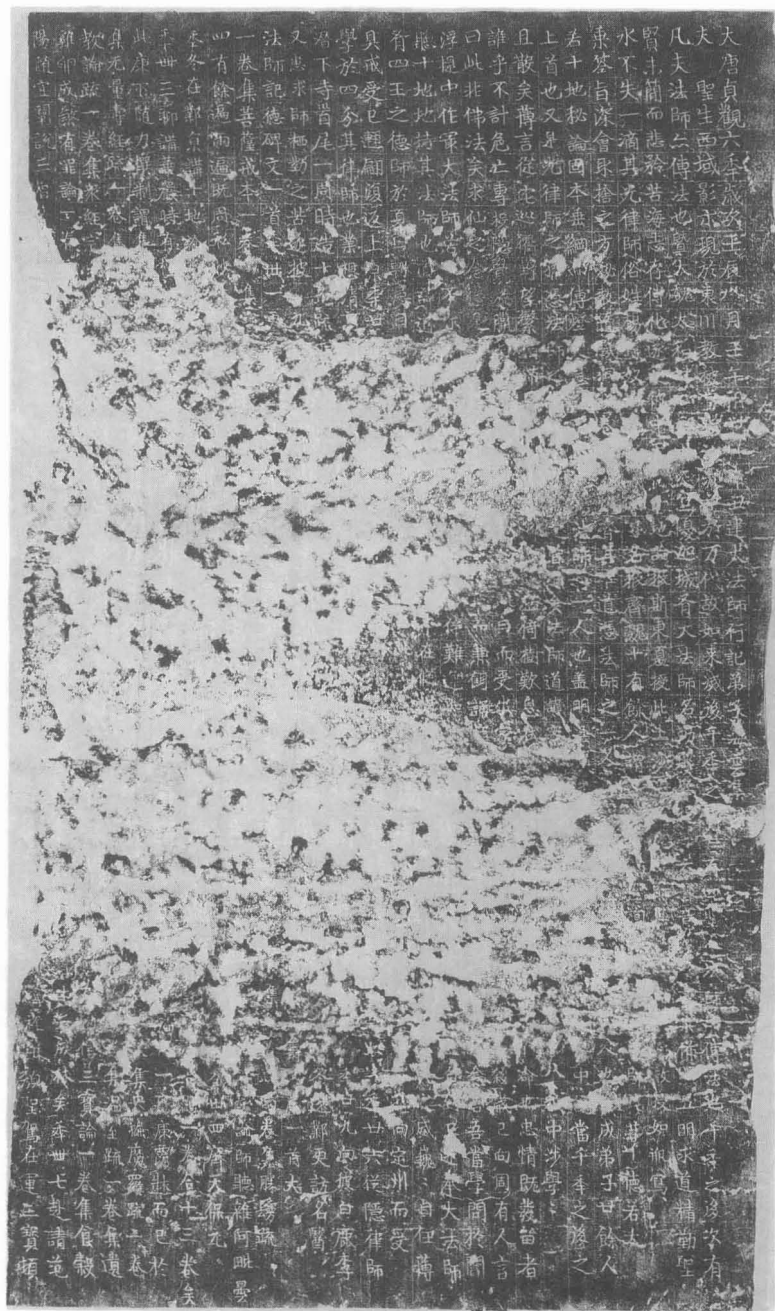
拓本11-1 玄方塔銘

玄林神道碑
拓本12-1
玄林神道碑（碑陽）

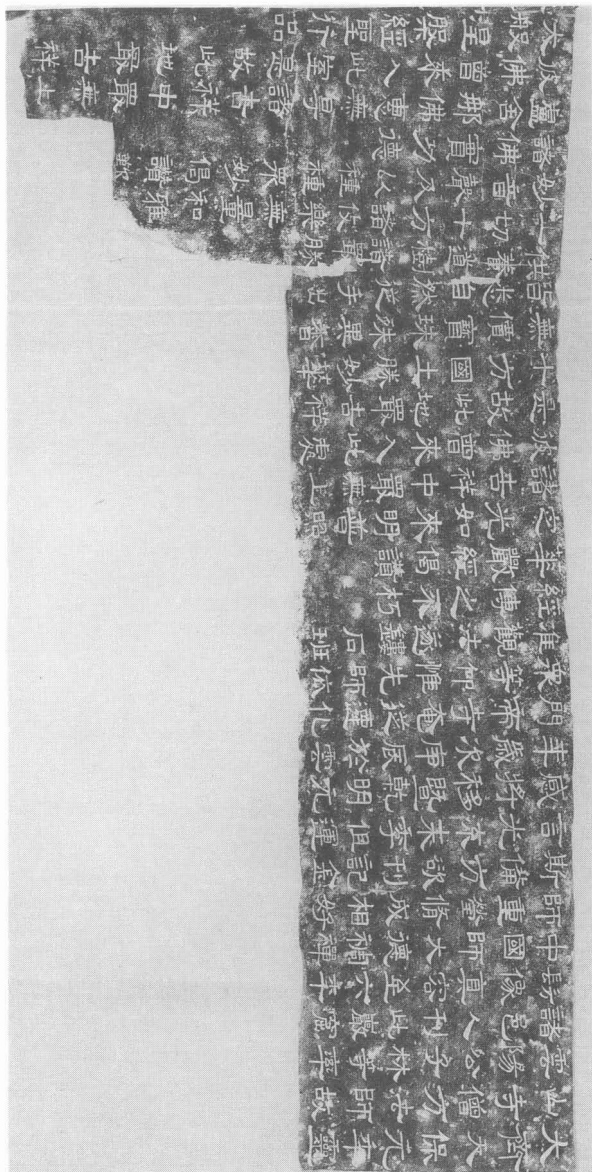
拓本12-1 玄林神道碑（碑陽）



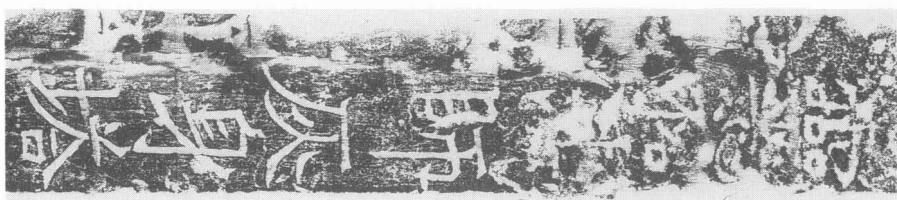
拓本12-2 玄林神道碑 (碑陰)



拓本13-1 靈裕大法師行記（右）



拓本14 方法師鑿石班經記



拓本13-2 靈裕題記